

『マクベス』について

気になること

藤 原 博

1.1 雷鳴と稲妻、荒野らしき場面に三人の魔女が登場。『マクベス』 (Macbeth) が始まって間もないころ、この魔女の声をそろえての次の台詞がある。

(1)

All (WITCHES)

Faire is foule, and foule is faire (10/1.1).<sup>(1)</sup>

語の意味が聞き手 (または読み手) に確認されるのは、場 (situation) と文脈 (context) によるとされる。Fair と foul はいずれも多義的で (OED<sup>2</sup> によれば fair では 17 項目、foul では 19 項目の語義が設けられており、それぞれその後に、この両語のいずれかを第一の要素とする合成語が 1 項目に纏めて付けてある)、劇が始まって間もないときに、唐突に投げ出されたこの 2 語の意味はそれほど明らかではない。観客に意味がはっきりしなくても、劇は止まらないで、どんどんと進行してゆく。あるいは書斎であるいは居間で、読んでいる人にとっても事情は同じであろう。多少は判らない単語に出会っても、目は止まらないで先に走る。

しかし注釈者とか翻訳家は、ここで解釈をし、訳を与えねばならない。たとえばミュア (Muir) は編纂したテキストのこの個所の註で、人間と魔女の価値判断が逆になるとする説をもあげている。すなわち、一方での fair は他方では foul になるのだとする。いつ頃からこのように考えられたのであろうか。坪内もその個所の訳の後で、人間と魔女の価値判断の逆転でこの個所の説明をしている。では fair が「きれい」、foul が「きたない」となるわけは何故か。それ以外の解釈は成り立たないのであろうか。

[坪内訳]

三人

清美 (きれい) は醜穢 (きたない)

醜穢 (きたない) は清美 (きれい)。

程なくマクベスの次の台詞になる。

(2)

Macbeth (2)

So foule and faire a day I haue not seene (114/1.3).

[坪内訳]

マクベス

こんな穢るしい (=むさくるしい) 清らかな日は、かつて見たことがない。

作品の 10 行目と 114 行目の反意語が対照的結合によって「ひびき合い」を示す場合、これを訳文に移すには漢字を同じくし、またその読みをも同じにする必要がある。この点で坪内訳はこの個所では充分とは言えない。この「ひびき合い」を指摘されている福田氏 (同氏訳 解題 p. 134) も同様である。さらにこの部分がこの作品の他の部分、あるいは作品全体とどのように関わっているかが、後で判るような、伏線的な表現にされなければならない。手許にある他の諸家の訳を、おおむね時代的にならべて見よう。

[ 野上訳 ]

三人の魔女

きれいはきたない。きたないはきれい (10)

・  
・  
・

マクベス

こんなきたないきれいな日は見たことがない (114)

[福田訳]

三人の魔女

きれいは汚い、汚いはきれい(10)

・  
・  
・

マクベス

こんないやな、めでたい日もない (114)

この両氏の faire と foule についての解釈は、坪内訳のながれに沿っているように思う。

[木下訳]

三人 (魔女)

輝く光は深い闇よ、深い闇は輝く光よ (10)

・  
・  
・

マクベス

闇になったと思うと輝く光がさしそめる。初めてだぞおれは、こういう日は

(114)

技巧をこらした訳である。木下氏はご自身の訳書（岩波文庫版）の解題で引用の二箇所「ひびき合い」について述べていられる（pp. 151 - 52）。またこのように faire と foule を解された理由について、講談社版の訳書の解題（pp. 202・3）で述べられているが、私が想像するところでは、114 行を空模様と解されて訳を施され、10 行目をそれに合わせられたのではということである。So foule ... a day を「曇った日」、so faire a day を「好天気→輝くような」と解して出発されたのであろう。

[小田島 訳]

三人（魔女）

いいは悪いで 悪いはいい (10)

・  
・  
・

マクベス

こんないいとも悪いともいえる日ははじめてだ (114)

ここでは「いい」と「悪い」で統一していられる。原文の faire も foule も多義的ではっきりしない語であるが、その取り方は観客読者のすべきこと、またいずれ判ること、同じく多義的な日本語の「いい」と「悪い」と訳に当てられたのであろうか。

[松岡 訳]

三人（魔女）

いいはひどい、ひどいでいい

・  
・  
・

マクベス

ひどいのか良いのか、こんな一日は初めてだ

松岡氏は問題の二語を「いい」と「ひどい」で統一していられる。またこの台詞の意味は伝統的解釈からは離れてはられないと思われる。

三人の魔女はマクベスによびかける。

(3)

1. WITCH

All haile Macbeth, haile to thee Thane of Glamis.

2. WITCH

All haile Macbeth, haile to thee Thane of Cawdor.

3. WITCH

All haile Macbeth, that shalt be King hereafter (124-26/1.3).

魔女 1.

グラームズの領主マクベス様、ご機嫌よろしゅう

魔女 2.

コーダーの領主マクベス様、ご機嫌よろしゅう

魔女 3.

国の主となられるマクベス様、ご機嫌よろしゅう

(試訳)

バンクォー (Banquo) の自分にも語るようにという注文に応じての魔女の台詞

(4)

1. WITCH

Lesser than Macbeth, and greater.

2. WITCH

Not so happy, yet much happier.

3. WITCH

Thou shalt get, Kings though thou be none :

So all haile Macbeth, and Banquo (141 - 44/1.3).

魔女 1.

マクベスほどには偉くはないが、もっと偉い

魔女 2.

マクベスほどには幸いでないが、もっと幸い

魔女 3.

子々孫々から王がでる、お前様は王ではないが

(試訳)

「マクベスほどには偉くはないが、もっと偉い」で始まる三人の魔女のそれぞれ一行の台詞の連なり（その最後に i 行の歎呼がつくが、これは三人の声を揃えてのものかも知れない）。この反意語の対照的結合は、一方では引用 (1) の三人の魔女の台詞 (10 行) との対応をはっきりと示すものである。他方ではマクベスとバンクォーの運命の相違、対照を提示する。引用 (1) は反意語の対照的結合であった。引用 (4) の魔女の台詞の連なりも、最後の行を除いて、各台詞とも反意語の同様な結合である。しかも語は、表面的な意味の他に、他の第二次的な意味を包んでいることもある。

では引用 (3,4) は何を示そうとするのか。とりあえず引用 (1) の解き明かしとしておく。引用 (1) の冒頭の faire 自体の意味は、引用 (3) の三人の魔女の台詞の連なりでマクベスに関わるのではと思われてくる。ここで引用(4)の三人の魔女の予言が響く。ここで引用 (1) の前半の (faire から) foule への推移の、マクベスにとって伏せておいた意味が暗示されているのではないのか。また引用 (1) の後半、foule から faire への推移はバンクォーとその子孫についての予言ではないのか。

引用 (3) はマクベスの運命の一部分の予言としよう。だが引用 (4) のほうが響き渡るように聞こえる。それは 1 つには、引用 (1) に対応する反意語の対照的結合が (4) で再び繰り返されることによる。さらにまたこの作品での主な 2 人の人物の一生の決算とも言うべきものが示されているからである。さらにまた忘れてはならない。この作品はゼームズ 1 世 (James I) としてロンドンに乗り込んだステュアート家 (Stewarts) の当主に対しての祝賀のためのものである。ステュアート家はマクベスに対比された人物バンクォーの子孫とされる。比喩的な表現をしばらく許されたい。『マクベス』の始めの部分の展開は次のように思われる。ゆるやかな捉え難いメロディーが、まずは流れる (引用 1)。ふと気づくと、まえに聞いたぞと感じる短いメロディーが聞こえる (引用 2)。やがて、フォルテ (引用 3)、さらにもっと強く、ホールに響きわたる、フォルティシモ (引用 4)。それは三回繰り返された魔女のマクベスについての予言であった (引用 1,3,4) をしたい。そこで引用 (1) の faire と foule の意味、そしてその訳語は引用 (3,4) にふさわしく選ばなければならない。(ここで忘れてはならないのは、引用 (1) の二語 faire と foule の意味が、引用 (2) でのそれらの語と意味内容を同じくするとは限らないことである。多義的な語を地口に使うときに、同じ語でありさえすれば良いので、意味が一致しないまま使うことも多い)。

今まで引用 (1) がこの作品のテーマで引用 (3,4) はその説明としてきた。再考を許されたい。引用 (3,4) が物語の展開には中心であって、(1) と (2) は、いわばその前奏ではないだろうか。これは証明する外的な資料がある。シェイクスピアの多くの作品では、その資料が判っている。この作品ではホリンシェッド (R. Holinshed)<sup>(3)</sup> の『スコットランド史』(The History of Scotland 1571) である。またその原本はボイス (H. Boece) のラテン文の『スコットランド史』(Historical Scotorum 1527) である。ボイスはアバディーン (Aberdeen) 大学の初代学長をつとめたが、この書は途方もないでたらめな本とされ、史書としては評判が悪い (飯島 1991 : 503. また WID<sup>3</sup> 参照)。こ

のホリンシェッドによれば、「マクベス」の説話の記述は、引用 (3) と (4) に対応する箇所から始まっており、引用 (1) と (2) に当たる箇所はない。引用 (1,2) の箇所は詩人がこの作品の創作に際して付加したもので、物語の展開そのものとの関係は、それほど密ではない。対応箇所をホリンシェッドから引用する。

マクベスとバンクォーは王が滞在中のフォレス (Forres) 目指していた時のこれは二人旅で他に誰もいなかったが、気ままに歩き、森と野を抜けていたが、この時、だしぬけに野のただ中で異様な風体の三人の女があらわれた。とても今の世の者とは思われない様子であった。その姿に呆れてじっと見つめていると、そのうちの 1 人が語りかけた。「グラームズの領主 マクベス様、ご機嫌よろしゅう」(マクベスは父のシネル (Sinell) が亡くなって、その跡をついで間もない頃であったが)。三人のなかの別の者が呼ばわった、「コーダーの領主 マクベス様、ご機嫌よろしゅう」と。残った 1 人は叫んだ、「いずれはスコットランドの王とされますマクベス様。ご機嫌よろしゅう」

バンクォーは言った、「お前達は何者だ。私にはそれほど好意的ではないように見受ける。ここにいる連れには、大層なお役目を並べ立てたあげく、王位までも彼に帰する。ところが、私には何もよこさないのだ。」「ごぞいますぞえ (彼女たちの 1 人は言う)、お連れ様よりは、あなた様にはずっと良いものを約束しますぞえ。あの方は王になりますが、そのご最後はお気の毒、後を継ぐ方もありませぬ。それにひきかえ、あなた様には王にはなられませぬが、スコットランド王国を代々と治める方々があなた様にはお生まれなさいますぞえ」(Holinshed, p. 268)。

これで引用 (1) の faire と foule の意味を探る準備がととのった。

## 1.2 幾つかの辞書で上の二語を調べてみよう。

Onions (1951) では、fair は名詞、形容詞、副詞のそれぞれが別の見出し語として立てられている。その中心は形容詞と思われるので、形容詞の項を見ることにする。

「“beautiful, clean, bright, unsullied” という具象的な意味と、それらの直接的な比喩的用法の他に、称賛の形容詞として、大いに広く使われている。…」

ここに挙げられた説明では引用 (1) の fair の意味は理解しがたい。挙げられた単語はみなかなり多義的で、それが使われる場のある程度の説明がない限りは役に立たない。Foul については、fair よりも意味が詳しく記述しており、それは 5 項目に分けてある。項目ごとに 1、2 の例文も挙げてあるが、この程度の説明では納得できないであろう。

Schmidt (1962) で本稿の引用 (2) の fair の意味を求めてみよう。この辞書では形容詞の fair と副詞の fair は別の見出し語としてある。形容詞の fair は意味が 9 項目に分かたれている。その各項目には意味を示す語、すなわち fair のこの場合の同義語が 2、

3 語与えてある。これに該当する例文がシェイクスピアから引いてある。その他の記述はない。意味として示された語も多義の場合が多く、さらに語義の配列も雑然としている。この場合は fair の語義リストの項目 (2) にいま問題にしている例文が提示してある。その項目に与えてある clear... この例文での fair の語義だと判る。もっと極端な言い方をすれば、意味が判った後で、その意味の記入してある項目が確認される。この文では天気のことらしいと見当がつき、この語の意味項目でこの場にふさわしい意味を選び出す。foul も同様にしてその見出し語の語義の 8 項目のうち、この fair に対立する語義 (5) が該当するものと思われてくる。結論として言えば、この辞書も簡潔に過ぎて分かりにくい部類に入るだろう。OED<sup>2</sup> で fair を見ることにしよう。

Of the weather: Favourable, not wet or stormy. Also with some notion of sense

I: Fine, bright, sunny. ... (fair 12. a.)

Of the wind: Favourable to a ship's course. ... (ibid. 13)

Giving promise of success: 'likely to succeed' (J.); likely, promising, advantagous, suitable. Of a star, omen: Propitious (ibid. 14)

このような語義の纏め方がしてあると、語義の推移も判るような気がしてくる。

「好天気」 → 「(船の運行について) 順風の」 → 「(世渡り) 順風満帆の」

foul について、

Of the weather, etc. : Unfavourable, wet and stormy. Cf. FAIR a. 12  
(foul A. 15)

Of the wind : Contrary, unfavourable (ibid. A. 16)

ただし項 16 には問題がある。この項の初例には 1726 年の年代が記されている。しかし OED<sup>2</sup> での fair の第 13 項に対応する foul の語義での例は、もっと古い年代にすであつたと考えたい。MED にこの語義が収録されているのだから。

MED で fair (adj.) を確認してみよう。

Of weather, the day, season, etc : bright, clear, pleasant ; not foul, rainy, or stormy (fair 4 (a))

Of wind : not excessive ; favorable for a ship's passage ; of a ship's passage : favorable (ibid. 4 (c))

Affording expectation or proof of good fortune ; auspicious fortunate (ibid. 5 (a))

MEDでのこの記述はOED<sup>2</sup>の対応個所の記述と一致する。ではMEDでの foul (adj.) についてはいかようであろうか。

of weather, sky, etc. : stormy ; ... foul and fair, storm and sunshine  
(foul 2 (d))  
of persons : abject, low, miserable, wretched ; ... (ibid. 4 (a))  
of actions, events, occupations : miserable, unlucky, unfortunate,  
shameful ; ... fair and foul fortunate and unfortunate (ibid. 4(c))

上記 4 (c) の記述で、OED<sup>2</sup> の foul の記述の欠けた事項を埋めることができよう。シェイクスピアは近代の冒頭の人で、中世に接している時代の人であるから。引用 (2) は一見して天候に関わっている。しかしこの反意の二語に意図されるところは多様である。

- (イ) 引用(1)がこの作品のテーマと関わっていることを気付かせるために faire と foule の繰り返し
- (ロ) 引用(1)の faire と foule の意味があまりに明らかにならないためにする目晦まし
- (ハ) 人の世で幸不幸の見通しはきかないという述懐。

いよいよこの作品の 10 行と 114 行の訳を試みなければならぬ。筆者は文才の乏しい一介の英学者に過ぎない。ただこの部分の私の理解を提示し、ご批判を仰ぐためである。

晴れるとおもえば荒れ、荒れるとおもえば晴れる、人の世は (引用 1)

荒れているのか晴れているのか、このような空模様、おれは知らんな (引用 2)

1.3 さてこの三人の魔女の声をそろえての最初の台詞、本稿での引用 (1) は何を言いたいのであろうか。この台詞の作品の中での前後関係から、その意味を探ろうとした。またいくつかの日本語訳を拝見させて頂いた。すでに私の試訳も勇をふるってお目にかけて。しかしこの個所について、いくつかの注釈本をも、見ておく必要はないだろうか。この大劇作家の作品の注釈は無数と言えるほどにあつて、目を通すことは大変である。だが筆者のような解釈をされる方がいるのか否かを、知りたいという興味もあった。一介の英学者に過ぎない私は、この部分の貧弱な理解を示し、ご批判を仰ぎたいと思う。

シェイクスピア (生没 1564-1616) 没後 150 年ほどに出された大学者ジョンソン博士編集 シェイクスピアの注釈本 (1765) から、この問題個所の脚注を見ることにしよう。

ジョンソン 説 (1765) (Johnson, Samuel. 生没 1709-84)

(i)この台詞(拙稿での引用(1))は「天候はすぐさま変えられる」とする魔女の自負の現れとする。その延長として、Mcb 114行のマクベスの台詞(拙稿での引用(2))を、天候の変わり方の早さにたいする彼の驚きの表白とするウォーバートン(Warburton, William. 生没 1698-1779)に言及している。ただし Mcb = Macbeth. 以下同様。

(ii)さらにジョンソンは次の主張をしている。魔女は心が曲がっていて、人に「よし」と思えるものが「あし」く、人に「あし」と思えるものが「よし」と思えるのだと主張する。これは長く従われた解釈のようで、小田島氏の訳はこの伝統に従われているのであろうか。

スティーヴンズ 説 (1778) (Steevens, George. 1736-1800)

ジョンソン(1765)の改訂増補版で、スティーヴンズを加筆を中心に見よう。

(i)上記ジョンソン(i)に従って、この作品で魔女に対してのマクベスの次の台詞は成りたっているのだとする。魔女の天候に対する支配力を示している。

Though you vntye the Windes, and let them fight  
Against the Churches (Mcb 1359-60)

「風袋(ふくろ)の紐を ゆるめても  
嵐を寺に よせるとも…」(試訳)

(ii)ジョンソン(ii)に従って人間と魔女の好悪、善悪、美醜の判断の逆転を挙げている。

(iii)スティーヴンズは、ファーマー(1767?)に従ってスペンサー(Spenser, Edmund)の Faerie Queene (略記号 FQ) から次の引用をした。

Then faire grew foule, and foule grew faire in fight (sic) (FQ IV, viii, 32)

「その時、美しかった人は醜くなり、醜かった人は見目麗しくなった」

スティーヴンズの言いたかったことは、faire と foule と言う反意語対立的結合は、古くからあった、シェイクスピアもそれに従っているのだとしたらしい。

ファーマー(Farmer, Richard)の生没1735-97。上記引用文の fight は sight の誤り。たとえば、ファーネスによって訂正されている。

マローン 説 (1821 / AMS 1966) (Malone, Edmund / Edmond 生没 1741-1811)

(i)魔女は天候を急変させることがある(ジョンソン(i))。いま問題にしている行も、それを示す台詞と彼は考える。また Mcb 114 もそれを示す台詞と考えている。

「荒れているのか晴れているのか、このような空模様、おれは知らんな」(拙訳)  
さらにスティーヴンズ(i)に従って Mcb 1359-60 を考えている。

(ii) 上記ジョンソンとスティーヴンズの(ii)を取り上げて Mcb 10 を解している。  
すなわち、魔女は心が曲がっているから、人の価値判断とは逆の判断をするという。

(iii) スティーヴンズ (iii) に従って、FQ IV, viii, 32 を引用しているが faire と foule の結合に注目しているだけである。

ようするに二人の説にそっているだけで、独創性はない。

ファーネス・説 (1873, 1963) (Furness, Horace Howard 生没 1833-1912)  
ジョンソン (ii) と同じである。スティーヴンズが言及したファーマーのスペンサーからの引用の綴りを訂正している。

Then faire grew foule, and foule grew faire in fight (FQ IV, viii, 32).

訂正 fight → sight.

同じく FQ から別の箇所を指摘してシェイクスピアとの関係を考える説を挙げている。

Then was she faire alone, when none was faire in place (FQ I, ii, 38).

「その時まがまがしき魔女が術をかけると、...

この魔女のみ美しくなった、他に美しき人はその場にいなかったのに」

この箇所では faire と foule の反意語の対立的結合はない。ただ faire と none... faire の対照だけである。またシェイクスピアのこの作品には魔女が美女への変身（またその逆の変身）はまったくない。魔女は不気味な存在であるだけである。

The Riverside Shakespeare と称せられる次の二書には、今問題にしている箇所に、註はない。

White, Richard Grant (ed.) 1881, 1901/1911.

Evans, G. Blakemore (ed.) 1974.

J. D. ウィルスン 説 (1947, 51) (Wilson, John Dover)

この行については何も述べていない。ただ Mcb 2 行目については G. L. Kittredge (1939) を引用して次のようにいっている。「魔女とか悪霊 (demon) とかは、悪天候で—これは彼らが引き起こしたと考えられる場合が多かった—とりわけ活動的であったのだ」としている。これは Mcb 11 行目の説明になるであろうが、それ以上の響きあいは期待できない。

ウォルター 説 (1962, ... 69<sup>6</sup>) (Walter, J.H)

魔女の悪霊 (demon) への呼び掛けで、善悪の基準の逆転、実相と幻想の混同、事実の歪曲を求めるものとする。また人の心には善悪の両面があるのだから、これを混乱させようとするものとする。しかしこの主張では、この作品でのこの台詞の持つ意味は希薄である。

ミュア 説 (1962, 84) (Muir, Kenneth)

スペンサーの FQ IV, viii, 32 を引用し、faire と foule の対立的結合は慣用句的表現であったとし、(S (iii) 参照)、このせいでシェイクスピアはこの句を使ったのだとする。またこの行は価値評価の逆転を示すとしている (J (ii))。さらに Mcb 1141 では、foule は今日の悪天候、faire は今日の先頭の勝利をさすとする。

So foule and faire a day I have not seene.

#### ブルック 説 (1990) (Brooke, Nicholas)

彼はこの行を慣用句的表現とし、その前半がとりわけ流布しているとする(その意味は日本語での「外は如菩薩、内は女夜叉」に似ているのであろうか)。しかし後半がこの作品の「主モチーフ」としている。しかしこれでは明解さを欠く。作品全体にこのことが言えるのか、主人公マクベスには当てはまらないようであるが。バンクォーに言えるのか、彼は主人公ではないけれども。それとも新しい王家に対する祝福と言うのであろうか。

#### ブラウンミュラー 説 (1900-94) (Braunmuller, A. R.)

全面的にブルック説と同じである。さらに Mcb 114 ではミュー説と同じ。

#### 坪内 説 (1935)

日本語訳のこの台詞の後につけられた説明では「その(=魔女の)自然観は人間のそれとは逆」としてある。上記ジョンソンとステューブズに似ている。また faire と foule を「きれい」と「きたない」とする点では、ステューブズ (iii) のファーナー説参照。

#### 市河・嶺 説 (1971)

価値、好悪、美醜の判断は人相互により異なるとしてある。価値評価、善悪、好悪の基準は魔女と人間とでは異なるとするのが伝統的主張であったから、やや特異であろう。ただこの「人相互」という表現に、魔女をもこめてあるのかも知れない。

まだ見るべき注釈本は多いと思われるが、筆者が見ることができたのは以上の通りであった。感じられたことは、ジョンソン、ステューブズが現在でも生きていることである。またミュー、ブルック、ブラウンミュラーには共通する性格が強い。ただ『マクベス』の問題の台詞についての私見は変わってはいない。Mcb 10 と響きあう台詞があと二回ちりばめられていると思えるからである。また同様に、その他に意味の重い台詞が三回繰り返されているように思われたからでもある。これらがこの悲劇の全体を織り成す縦糸と横糸であると思われた。諸賢のご批判を仰ぎたい。

この作品の多くの日本語訳本、さらにその背景にあるかも知れない諸注釈本の注、これらは筆者と見解が異なるように見える。そこで拙論を無条件に退ける方々も多いと思われる。他方、それ故に拙論に多少の独自性を認めて検討して下さる方もあるかも知れ

ない。筆者の頼りは OED、MED とホリンシェッドであり、また出発点は作品からの筆者の読み取りである。この場合は読み込みを避けたつもりである。

## II. 疑問 3 種 (反意語の対照的結合—witch—“3”)

### 2.1 引用(1)を思い出して頂きたい。

Faire is foule, and foule is faire(10)

この表現で、清新な感じを抱かれる方も多いのではあるまいか。問題は、「形容詞+be+形容詞」という簡潔な構文であること、また形容詞が主語になっていることである。現在でもこのような文に出会うと、同じような感じを抱かれるのではないかと思う。先日、次のような例を見た。

SMALL IS SMART.

これは朝日新聞(平成 10 年 6 月 26 日の p. 28 (12 版) の 1 ページを使つてのバイクの広告に見られた。全体がブルーがかつた色調で、バイクの絵があり、上記の文が三回繰り返されていた。同じタイプの文は、古くはチョーサーにたまたま見出された。

‘Unhappy is unseely, ’ thus men sayth (CT I 4210)

「虎穴に入らば虎兎を得ず」と人はいうじゃないか(榊井迪夫訳『カンタベリ物語』上巻 p. 187)

このような構文を文法的に処理することは簡単である。Jespersen, Modern English Grammar II に次のような記述がある。

「いかなる語、またいかなる語群も、‘... という語 (句、文)’を意味すると理解されると、実詞にかえられる。」(8. 21)

筆者のした引用(1)に見られる faire と foule の並立の公式、すなわち「形容詞+動詞 be, grow など+形容詞」の例としては、前節 (1. 3) のステーブズズの項にあるスペンサーからの例も見られたい。この公式に従っていない別の形式の対照的並立の例もある。たとえば foul or feir など。チョーサーには、この種の 7 例<sup>(4)</sup>が見られる。RR の Fragment B にも 1 例あるが、この Fragment は彼の筆になるものではないかとされている。本稿 1.2 でこの両語の説明のために MED から引いた説明(またはその文例)のなかにこの反意語の並立が見られた。この両語とも古英語以来の単語であるが、OE 詩のコンコーダンスにこの並立の例が見られない。また ME のガウエイン・グループのコンコーダンスにも、『‘ふくろう’& ナイティンゲール』のコンコーダンスにも見られない。さらに調査を続けたいと思う。



「多義性を持つ一語」という意識が彼にあつて、(また当時の観客一般にもあつて、この台詞をバンクォーに言わしめたのではないかと思う。ただ具体的に witch の男性の場合と女性の場合は、女性の場合が圧倒的に多いのではないのではないかと思う。OED<sup>2</sup>でも女性の witch の見出しに、引例がはるかに多いからである。八木氏も指摘されているように日本語でも「魔女」はあるが、それに対応する男性の語には苦勞させられる。われわれにも、このような存在は女性という意識が強いのであろうか。

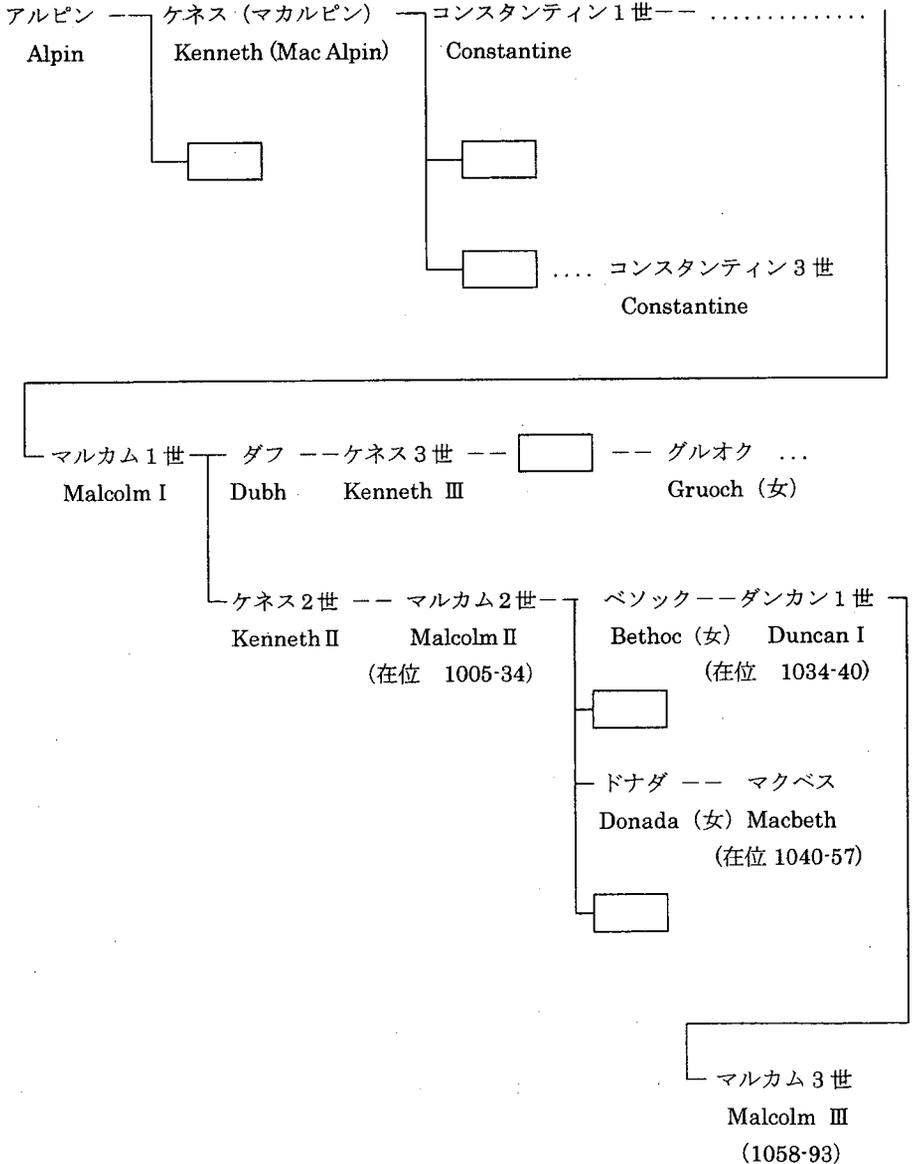
2.3　すでに述べたことであるが、この作品では 3 という数がかかなりの意味を持っているようである。魔女が三人、初めに 3 つの台詞、(わり台詞をこめて) の連なり。そのあとで魔女の声を揃えての予言(引用 1)があり、その予言の解明にもなる繰り返しが 2 回(引用 3,4)合わせて 3 回。さらに幻影が与えるマクベスへの予言がある。その一つには「女から生まれた者にマクベスはやられることはない」(1387-88 行)であり、さらに一つは「バーナムの森が、そびえ立つダンシネインの丘の彼のもとに来るまでは、彼は破られることはない」(1399-1401 行)という予言である。マクベスはそれをそれぞれ二回繰り返す。(前者は 1902-3 行、2053-55 行; 後者は 1898-99 行、1957-58 行)。かくして三種の予言がそれぞれ三回繰り返される。2083-4 行は破局におけるマクベスの叫び。

この作品も終わりに近い頃、マクベスに対しての三人の魔女の「見せようぞや」という台詞の連なり(1414-16 行)と、さらに三人の声を揃えての 2 行の台詞(1418-9 行)の後、バンクォーの子孫である 8 人の王<sup>(6)</sup>の幻とバンクォーの幻がマクベスの前に現れる。8 人目の王が鏡を手をしている。鏡にかぎりなく子孫の王が映されてることで、かぎりなく子孫が王として続くことが示されている。これはバンクォーについての三回目の予言と言いたい。引用(1)と(4)が、バンクォーにも関わっていたからである。マクベスに対する三種の予言はこの作品の終りまでにすべて実現される。バンクォーに対する予言の実現はその後に属することになる。マクベスの死後のことである。つまり舞台の上では実現されない。そこでここに幻の形で、同時にその実現を示しておくというのであろうか。

この作品では、既述したように「3」という数字が目立つ。しかしこれはシェイクスピアが意図的に設定したものではない。彼が種本としたホリンシェッドで、マクベスとバンクォーがダンカンのもとに行くために、森と野を横切っている時に魔女が三人、この両者の前に現れる。ホリンシェッドは話をここから始める。大詩人はその前に三人の魔女のやり取りをつけた。これは三人の魔女の割り台詞とか、三人の台詞の連なりである。これで重大な予言も三回にわけて述べられる結果となった。かくてこの数が本作品では重要な意味を持つようになったと思われる。

# スコットランド王家系図

## マクベスを中心として



### Ⅲ. マクベス (名と人と時代)

3.1. マクベス (1005? - 57. 在位 1040 - 57) は実在の人物である。彼はスコットランド王家の系図にも出てくるし、王位にあつて殺された年も判っている。Mac - はスコットランド、アイルランドに多い家名の前綴りである。‘son’を意味する。耳にすることの多い Johnson とか、Mendelssohn の ‘-son’, ‘-sohn’ にあたる。Mac - つきの家名といえば、MacArthur, McCarthy などなど<sup>(6)</sup>。この作品にでてくる人物は、みな個人名なのに、彼だけ家名で呼ばれるのは納得できない。もっとも、スコットランドで家名が現れるのは、およそ 200 年後のことである。たとえば、Robert Bruce<sup>(7)</sup> とか、John Balliol<sup>(7)</sup> とかが、王位継承をめぐる現れる。イングランドではそれより少し早く、Plantagenet 家の名が開かれる。そこで Hanks & Hodges (1988) で MacBeth の項を見ると、「この家名はゲーリック (スコットランドのケルト語) の個人名 Mac Beatha ‘Son of Life’, i.e. ‘man of religion’ からきたもの」とする記述がある。すなわち、この作品では Macbeth は Duncan とか Banquo とかと同じく個人名を解すべきであろう (現在では Macbeth という家名もあるが)。OED<sup>2</sup>によれば、‘Mac-’はアイルランド - ケルト語とゲーリック (スコットランドのケルト語) の ‘mac-’ (= son) からきたもので、ウェールズ語の ‘mab’ (←map (古ウェールズ語)) に対応するとする。このことについての問題は後述する。

さらに残った問題は、これらの語の要素配列である。Johnson, Williamson, Tomson など、この配列の中心となるのは、son である。世に son は多い。親の名を出さないと、誰を指しているのか明らかでない。そこで親の名を出して次の名詞 (次例の son とか、ing など) を限定し修飾する。

(a) 名詞句 (修飾語 + 被修飾語) → 合成語 (修飾的要素 + 被修飾的要素)

John[’s]	son	→	Johnson
Brown	ing	→	Browning

(この -ing も、「子孫」を示した。動詞につく接尾辞 -ing とは同音意義)

Mac Beatha (→Macbeth) の要素配列は、上記の形式とは逆になる。

(b) 名詞句 (被修飾語 + 修飾語) → 合成語 (被修飾的要素 + 修飾的要素)

Mac	Beatha	→	Macbeth/ -beth
-----	--------	---	----------------

もし要素配列が形容詞と名詞の場合、上記の公式 (a) に従うか、公式 (b) に従うかを問題にしてみよう。英語では公式 (a) に従うのが原則的である。ケルト語では(b)に従うようである。手許にある系図によれば、マクベスの母は王家出身のドナダ (Donada)、父はモリー州の知事フィンラック (Finlaech) とされている。この父の役名は *mormaor* (*mor* great + *maor* bailiff, steward) であるが、別形 *maormor* は、名詞 + 形容詞という語順を守るべきだとして生じたものとする説明が *OED*<sup>2</sup> に見られる。この「名詞 + 形容詞」の語順はあきらかにケルト語のものである。

グリーンバーグ (Greenberg 1963) の Appendix I から、ウェールズ語の調査の結果を引用してみたい (日本語も参考のため併記)。

	VSO	Pr	NA	ND	N Num
日本語	I I I	—	—	—	—
Welsh	I	+	+	+	—

この表の説明を簡単におきたい。調査対象の言語が地域的に特定部分に集中しないことと、発生的に近い言語にかたよらないこと、あるタイプの言語に集中しないこと、この原則に従って選んだ世界の 30 言語を、彼が語順の基本と考えた事項について調査、その結果を纏めたものがこの表である。

- (a) VSO の例で、I は基本として VSO 語順を、I I 派 SVO 語順を、I I I は SOV 語順を守ることを示す。S = subject, O = object, V = verb.
- (b) Pr = preposition. Pr の例で + は前置詞を常用する言語であることを示し、- はその逆、後置詞を常用する言語であることを示す。日本語の助詞は後置詞として扱う。
- (c) NA の列の + は「名詞 (N) + 形容詞 (A)」。この列での — は AN 語順が基本。
- (d) ND の列は + は「名詞 + 指示詞 (D)」。この列の — は、「指示詞 + 名詞」が基本。  
D = Determiner
- (e) N Num の列の + は「名詞 + 数詞 (Num)」を、— は「数詞 + 名詞」を基本とする。Num = Numeral.

これから明らかなことは、スコットランドのケルト語 (ゲールック) の「名詞 + 形容詞」は、その同族のウェールズ語にも基本的なことである。さらにこれを拡大して「被修飾語 + 修飾語」が、広くケルト語に基本的なもの認められないだろうか。

3.1.2 トウルナイゼン (Thurneysen 1946:327) には次のような記述がある。「(古アイルランド語の) 散文では定形動詞は常に文節の先頭にある」。それに反する場合がその後列挙してあるが、動詞先行型が基本であることは否定してはいない。また名詞を修飾する形容詞は名詞に続くことも、彼は認めている。「修飾的形容詞は名詞に続き、性、数、格の点で名詞と一致する」(op.cit.p.229)。この書の原本(1909)はドイツ語で書かれており、本書はその英語訳である。その頃の言語学の研究書は発音と語形論が中心であり、統語論には関心が向けられていない。本書でも同様である。上述の動詞と形容詞の文節での場所の他には、前置詞が用いられたことが明示してある。それ以外には要素配列は触れられていない。この書の題名の古アイルランド語とは A.D.900 以前のアイルランドのケルト語である。この時代はアイルランドのスコット人が、現在のスコットランドに移住し、その地を支配するにいたった時期である。その頃のスコットランドのケルト語は、アイルランドのケルト語と差異はないと言ってよかつたであろう。

フリューーリオ (Fleuriot 1989<sup>2</sup>) は中世期の島のケルト語 (アイルランドとブリタニアのケルト語) では、動詞は文の先頭にあるのが普通であつたとしている (op.cit.p.412)。ただ彼は統語論についての言及は多くはなく、要素配列については上述の動詞の位置についてのものだけである。しかしこれらの記述から、グリーンバーグが現代ウェールズ語の特性としたものが、古アイルランド語、また当時のスコットランドのスコット人の言語の特性でもあつたと思われる。(これらの事項については別稿を準備中。)

3.2 『マクベス』には、Mac- をもつ固有名がさらに一つある。Macduff(e) である。これは Mac+duff(e) で、duff(e) はゲールック語の dubh 'dark, black' を英語風にしたものとのことである (Hanks & Hodges 1988:156)。Macduff(e) はケルト語の要素配列に従っていて、'a boy dark' すなわち、'a dark boy' を意味する。本来はあだ名とか通称であつたものが、個人名となつたものとされている。この作品での場合、「色黒な」という意味が残されているものか、中世の生理学での「黒胆汁質の、憂うつ性の」意味を持つものかは、判断できない。スコットランドの西海岸にアイオーナ (Iona) 島に修道院ができて久しく (設立 A.D.563)、東海岸でもイングランドとの境のあたりのリンディスファーン (Lindisfarne) にも修道院ができて (設立 A.D.604)。中世に流行った人間の体液についての説も、聖職者から教えられて、行き渡っていたかも知れない。妻も子供も殺されて憂うつ極みにある人、ファイフ (Fife) の領主に「憂愁の人」というあだ名 Mucduff(e) が付けられ、これが実名をしのいで残つたのかも知れない。

3.3 マクベスは希代の悪人として思い浮べられる。文学作品に扱われた人物と、そ

の実像は一致する必要はない。作品は創作であるから。しかし登場人物の実像への興味がそそられるのも事実であろう。飯島氏の労作(1991:129 ff.)によれば、またホリンシェッド(pp. 264 - 5)によっても、マクベスはそれほど悪人でもなさそうである。ダンカンもバンクォーも、この点ではマクベスよりも、それほどには優ってはいないようである。もっともホリンシェッドもどの程度に信用できるかは判らないが。

スコットランドの王家は、アイルランドからの移住者とともにきたと言える。王位継承は飯島氏によれば、始めは王の長子が相続するのではなく、アイルランドから持ち込んだ様式によっていた。王位継承の資格のあるのは当初は二家、のちには三家の流れに属する家々があり、王が亡くなったとき、その家を除いた残りの家の長老のなかから然るべき人が選ばれて王位についた。実際には選挙などはなく、おおむね自動的にきまっていたそうである。これは長老相続制とよく呼ばれる。長老相続制から長子相続制へ切りかけるのが、マクベスと前後する時代である。マクベスはマルカム 2 世(Malcolm II. 在位 1005 - 34)の娘の子<sup>(8)</sup>であった。またその妻グルアク / ハ(Gruoch)は、マルカム 2 世より一代前のケネス 3 世(Kenneth III. 在位 997 - 1005)の孫娘であった。彼女にとっては再婚であったが(なおケネス 3 世とマルカム 2 世は、王位を継ぎ得る別々の家系に属する)。すでにマルカム 2 世は、王位の継承者として、別の娘の子<sup>(9)</sup>ダンカン(Duncan I. 在位 1034 - 40)を指名していた。さらにまたダンカン 1 世は長子マルカム(後に Malcolm III)をカンバーランド公爵(Prince of Cumberland)に任じて、長子が自分の死後すぐに王位を継承できるように、手を打った(Holinshed, p.269)。この爵位は後世のイングランドの Prince of Wales に対応するものであろう。マクベスからすれば、自分のほうがはるかに年長で、長老相続の伝統に従えば、当然自分が王位を継承するものと予想していたのであるから、ダンカンの処置は耐え難かったことと思われる。それどころか、ダンカンは「明らかにマクベスを亡き者にしようとしていた」(飯島 1991:131)とすれば、「マクベスはダンカンの殺害に成功し、王位を継承した」(同上)という結果になっても、マクベスをあながち非難はできないだろう。長老相続制から長子相続制への移行期に、スコットランドでは王殺しが多かったようである。

3.4 バンクォー(ロックアバアー知事 Lochquaber)とその子孫とされる人々についての記述は、ホリンシェッド(Holinshed, pp.271 - 72)に見られる。おそらく、これはボイース(Boece)の記述によったものであろう。バンクォーはダンカン殺しでは、マクベスの一味徒党に加わっていたとされる。

「そこでついにマクベスは、かねてからの味方が手を貸してくれるものと信じて、日頃の志を彼らに話したが、そのなかでバンクォーがもっとも主な仲間であった…」(Holinshed, p.269)

その後、バンクォーは疎んじられて、その子フリーアンス (Fleance) とともに、マクベスの手の者に襲われる。バンクォーは命をおとすが、フリーアンスはウェールズに逃げのびる。彼はその地で豪族の娘と通じて、その父に殺される。その忘れ形見は、ウォルター (Walter) と名付けられるが、長じて事件を起こし、ウェールズから逃れて、スコットランドに行く。ここで軍事的才能を現して、宰相 (lord steward of Scotland) となる。それから 6 代目のウォルターは、ブルース (Bruce) 家から出た国王ロバート 1 世 (Robert I) の娘マージョリー (Marjorie) と結婚する。彼女の弟デーヴィス 2 世 (Davis II) が亡くなった時、ウォルターとマージョリーの間の息子が王位を継ぎ、ロバート 2 世 (Robert II) となる。ステュアート (Stewarts) 王家の誕生である。その家名は steward という官職名からきた。マクベスが王位を継いだのは 1040 年であった。ロバート 2 世の即位は 1371 年であるから、その間 330 年、しかも波乱万丈の年月である。バンクォーから数えて 11 代目で預言適中とは、かなり不自然な感も否めない。シェイクスピアはとにかくホリンシェッドの言うところを劇に取り込んだのである。かくしてジェイムズ 6 世 (イングランドでは 1 世) のロンドン入りを祝ってこの劇が上演される。

#### IV. ケルト語とケルト人：ピクト人の問題

4.1 ケルト語について少しふれておきたい。これはインド - ヨーロッパ語の一分派で、かつてはトルコのガラテア地方からガリアまで、さらに海峡を越えてブリテン島からアイルランドまで広まっていた言語である。トゥルナイゼン (Thurneysen 1946 : 1 - 3) はこの言語が語られていた地域を基準にして、ケルト語をさらに二つに分ける。(a) 島のケルト語と、(b) 大陸ケルト語である。後者の言語的資料はほとんど残っていない。辛うじて大西洋とイギリス海峡に接した地域にわずかのものが残っているようである。

(a) の島のケルト語を表で示すと以下のようなになる。

- i. アイルランド、スコットランド、マン島のケルト語。
- ii. ブリテン島の北部を除いた地域のケルト語 (イ、ロ)。およびブリテン島からブルターニュに移ったケルト語 (ハ)。この群の総称はブリタニア語。
  - (イ) ウェールズ語、(ロ) コンウォール語、(ハ) ブルターニュ語北部を除くブリテン島のケルト語は、ヨーロッパ大陸の大西洋海岸 (スペインからライン河口に至る地域) さらに北イタリアまで、言いかえればアルモリカ (Armorica) を中心とする地域のどこかから、ブリテンに移住したケルト人によって持ってこられた (Jackson 1953 : 4)。これは鉄器時代のことと

されている。ヨーロッパの鉄器時代は 1000 B.C. に始まるとされている。ブリテン島のケルト語はウェールズ語をのぞき亡びた。アングロ・サクソン人の侵入を受けた結果である。ウェールズ以外のケルト人は、あるいは大陸に移住したり、あるいはこの新来者に同化された。これは 5 世紀半ば以後のこととされる。コンウォール語も 1800 年頃まで僅かに残っていたが、今は亡びている。ブルターニュ語は、ブリテン島のケルト人が逃れる時に、持ってきたブルターニュ半島のケルト語。文献的資料も残っている。現代でもこの地方の人はこの言語でウェールズの人と話しが通じる。厳密に使用区域で言語を分類するのであれば、上記の (ハ) は大陸ケルト語に入れるべきであろう。

iii. ピクト語 トウルナイゼンはこれをケルト語としている。上記 i にも ii にも非常に近い言語としている。この言語の資料として固有名詞が言及され、碑文についての研究論文も挙げられている。

また発音による分類法もある。インド-ヨーロッパ祖語での /kʷ/ を /k/ として残している系統と、/p/ に変えたグループである。これはそれぞれ Q-ケルト語、P-ケルト語と呼ばれるが、アイルランドからスコットランドにかけてのケルト語が前者であり、北部をのぞいてブリテン島に広まっていたのが後者である。ブルターニュ語も後者に属する。古アイルランド語 (A.D.900 以前) と古ウェールズ語 (A.D.1100 以前) には文献が多少のこされており、これらはケルト語研究には貴重な存在のようである。

歴史時代の始まる頃には、アイルランドにもケルト人は住んでいた。ブリテン島のケルト人との方言の違いは、原住地の相違、あるいは 2 つの島に定住後の発生が不明。

4.2 前にマクベス (Macbeth) の始めの要素 Mac を問題にした。それは「息子」を意味した。まだ家名のない時代に、例えば Kenneth なる人がいて、他の同名の人と区別するために、「これは Alpin の息子のことだがね」と説明を加えるために、次の言い方が生まれる。Kenneth Mac Alpin. やがて Mac 以下が家名になるはずである。すなわち MacAlpin. 実際は 13 世紀末にいたるまでは、スコットランドに家名は一般的でなかったと思われる。

OED<sup>2</sup> の 'Mac' の項に「Irish と Gaelic の 'mac' は Welsh の 'mab' に対応。この 'mab' は Old Welsh の 'map' から来た」とする記述がある。Q-ケルト語と P-ケルト語については前節を参照されたい。ウェールズ語は、アングロ・サクソン人がブリテン島に来て以来、現在まで残るただ一つのブリタニア・ケルト語のなごりである。マクベスの Mac は彼の属する生活圏とか階層とかが、スコットランドでも由緒正しい Q-ケルト語に属することを語っている。

OED<sup>2</sup> での Mac の項の記述を公式化すると、次のようになる。

(古ケルト語)		現代
(a) makwo - s > makko - s		> mac (アイルランド語、ゲールック)
(b) makwo - s > mapwo - s	> map	> mab (ウェールズ語)

拙稿で前に使った /kʷ/ の肩文字 /w/ は「わたり音」を示している。これを一個の独立した音として扱って /w/ としても良いだろう。この音は音声学では「(両)唇(軟)口蓋半母音」(labio - velar semi - vowel) とされる。/k/ は「無声軟口蓋破裂音」(breathed velar plosive) とされる。

(a) /k/ の軟口蓋の破裂性が強くはたらいた場合、/w/ 両唇音の性格が忘れられ、口蓋性のみ意識されて、/w/ は結局「口蓋破裂音」/k/ に同化される。

(b) /w/ の両唇性が逆行して作用し、本来の /k/ であったはずの音が両唇性を持つようになり、破裂性のみを保ったもの。すなわち、/k/ → /p/

上記 (a) は (a) の、(b) は (b) の説明である。両形式ともいずれかの接する音の影響による。これだけでは、Q - ケルト語と P - ケルト語のどちらが古い形を保っているかの判断は下せないと思われる。生成音韻論では公式化して、この推移を説明するであろう。お教えを受けたい。

4.3 ここで問題が生ずる。その1つはスコットランドのピクト人 (Picts) のことである。ピクト人については諸説がある。OED<sup>2</sup>にも幾つかの説、口伝によるものにまで言及がある。WID<sup>3</sup>は、これはケルト人ではないとしている。またその名については、ラテン語 *picti* からという説もある一方、原名をそれに音の近いラテン語の単語におきかえただけという考えもある (OED<sup>2</sup>)。ラテン語 *picti* は *pingo* の過去分詞 *pictus* の複数形である。「色を塗られた、刺青をされた」の意味で、戦いに際して戦士の様子を示すとされる。ピクト人は勇猛果敢であつたらしく、ローマ軍にはげしく抵抗して屈しなかったとされる (青山・飯島他 1991: 36, 58 など)。スコットランドの南部、イングランドの北部のアントニヌスの土塁<sup>(10)</sup>とハドリアーヌスの長城<sup>(11)</sup>は、ピクト人に対してローマ軍が建造したものである。ピクト人が現れる文献として誰しも思い浮べるのは、ビード<sup>(12)</sup>の『イギリス教会史』であろう (L.16/E.28)。彼によると、ピクト人は何そようかの船で、ブリテン島の海岸をぐるりと回って、Scythia からアイルランドにきて、スコット人のあいだに住まわせてくれと頼んだ。スコット人はこれを拒んで、対岸のブリテン島に住むようにとすすめる。ピクト人はその助言に従うが、自分たちは女性を伴っていないので、女性をだして欲しいと言う。スコット人はこれを容れるが、それに対する条件として、ピクト人のなかで王位継承について問題が生じた場合、女系のなかから王位継承者を選ぶという申し入れをした。これで折衝が纏まったとしている。これが事実なのか、ピクト人はスコット人のなかに侵入しようとして果たさず、婦人を奪って

去ったのか、判断しにくい。Scythia とはどこであろうか。Colgrave & Mynors はその編纂したビードの『イギリス教会史』のなかで、スカンディナヴィア半島の南部という説にも言及している (p.17 脚註)。その場合ブリテン島の北を廻って、アイルランド海に入ったことになろう。そうとすれば、ピクト語 (Pictish) はケルト語ではない。スカンディナヴィアにケルト人がいたとは考えにくいからである。

トウルナイゼン (Thurneysen 1946 : 3) は、ピクト語を島地区のケルト語のなかに入れ、アイルランドのケルト語にも、ブリテンのケルト語にも親近性をもつとしている。ピクト人の居住地がアイルランドとすると、南の地方から、男だけで移住してきて、後から同族の婦人が続いてこないのは異様である。ビードが言うようにブリテン島の海沿いに廻ってアイルランド海に入ったとすれば、トウルナイゼンの説のように彼らがケルト人の場合、南からアイルランド海に入ったであろうし、彼らはイギリス海峡の対岸の地域、P-ケルト語の地域から来たという可能性が強いだらう。アルモリカを中心として、北はライン河口から南はスペインにいたる地域 (Jackson 1953 : 4) のどこから来た群れであろう。ここで OED<sup>2</sup> の記述に気になることがある。

この辞書の Pict の語源の説明では、ガリアの民族、Pictavi と Pictones があげられている。Pictavi は筆者にはまだ不明であるが、Pictones は現在のブルターニュ (古名アルモリカ Armorica) の南に接して住むケルト人である。この部族はカエサル『ガリア戦記』(岩波文庫) に収められた地図「カエサル時代のガリア諸部族」で見出すことができる。著者の勝手な想像であるが、カエサルとのガリア戦争に敗れたこの部族の戦士の一団が逃れて来たものとしたいところである。いずれにしても、ガリアからおとされた部族は P-ケルト語を語ったはずである。

4.4 . ピクト人をブリテン島に追払ったスコット人は、5 世紀になると、スコットランドとアイルランドの間の島々とスコットランド西岸に勢力を延ばし始め、この地にダルリアダ王国 (Dalriada) をつくる (Colgrave & Mynors 1969 : 18, fn.)。長い抗争があって、ダルリアダの王アルピン (Alpin) はピクト人の王位継承者の女性と結婚する。その間に生まれたケネス、すなわち Kenneth Mac Alpin は、この 2 つの国を統一して、アルバ王国 (Alba) をたてた。これは 850 年の頃のこととされる。それ以来、スコットランドの王または女王は、長老相続制にもせよ、長子相続制によるにもせよ、ケネス・マカルピンに、さらにアルピンにつながっている (飯島 1991 参照)。スコットランドには沢山の民族がいたことになる。ピクト人、アイルランドからきたスコット人、スコットランドの南部にまで広がっていたケルトのブリテン人、5 世紀以後に主として東南部の低地にまで延びてきていたアングロ-サクソン人、北の島々のノルウェー人である。スコット人とピクト人が中核であったとしよう。私個人としては、ピクト人は P-ケルト語の民族と考えたいのであるが、英語の 'son' に対応するのが、'mac' であって 'mab' でないこと、行政上の地域名は 'スコットランド' であって 'ピクトランド' で

ないこと、‘ピクトランド’ (Pictland) は the Forth と the Clyde の北の地域を示す、いわば俗称であることから、ピクト人はスコット人に同化されたように見える。さらにこの地域が英語圏に入ってくるのは、イングランドの政治的軍事的優勢によるものであろうか。

ピクト人とその言語がスコット人とゲリック語に同化されたのは、地理的事項にもよるだろう。スコット人は狭い海峡をへだてた対岸から、人的補給がかなり容易であったであろうが、ピクト人はその原住地との往来が容易ではなく、いわば孤立したような状況にあった。このためスコット人に対抗できなかったのであろう。5世紀以後になると、ブリテン人 (ブリテン島の北部を除いてのケルト人、P-ケルト語を使う) は海峡をわたってガリヤのアルモリカに逃れるようになる (Thurneysen 1946: 2)。言うまでもなく、これはアングロ-サクソン人のブリテン島への侵入とその定住からの避難によるものであろうが、ブリテン島の北部が後にスコットランドと呼ばれるほどに、スコット人が勢力を振るいだしたため、ピクト人がイングランドの方向に進路を求めて、ブリテン人に圧力となったであろうこと、アングロ-サクソン人の呼び込みはこの圧力への抵抗策としての意味を持っていたのであろう。かくしてアルモリカはブルターニュ (Brittany, Bretagne) と名前を変える。やがて英雄アルトール (Artorius)、円卓の騎士と、ペイドン山 (Mt. Badon) の記憶を携えてきた人々は、武勲詩を抑えてロマンズ詩をヨーロッパにひろく流行らせることになる (Loomis 1963: 13 - 22)。

## V. 結び

5.1 『リチャード3世』について、その作品の魅力を「悪の美学」とか「悪の魅力」とかで説明される批評家は多い。重大な肉体的欠陥にも関わらず、己ひとりの才覚で強い力を持つ者、大きな力に守られるはずの者に立ち向かって、自己の欲望を充足してゆく希代の悪王リチャードはたしかに魅力的である。それでは『マクベス』はどうであろうか。文学的センスの皆無を指摘されても尤もな私の言うことであるから、お笑い種であるが、私はマクベスに悪の魅力は感じない。私にとって「悪の美学」とは、世の巨悪、絶大な権力者、鎧に身を固めた組織、偽善にみちた既成道徳などに徒手空拳で敢然として立ち向かって、たとえその結果、身を亡ぼしても、相手に一泡ふかせる行為に拍手を送る。このような行為を「悪人」がやってくれれば、ウツトリとする。しかし何よりもスマートさがなくてはならぬ。日本語の「粋」、「格好良さ」であろうか。

マクベスは魔女の予言にとりつかれる。びくびくとしながら事をすすめる。ためらう彼を唆した妻も狂死する。幽霊にも怯える。「女から生まれた者に、マクベスはやられることはない」<sup>(13)</sup> とか、「バーナムの森が、そびえ立つダンシネインの丘の彼のもとの来るまでは、彼は破られることはない」<sup>(14)</sup> とかの予言を頼りに耐えてきた主人公は、切り払った枝をかざして敵が近寄った時、この予言の破れたことを知り、帝王切開で生まれた男と決闘する時、魔女に欺かれたことを知る。

(6)

Macbeth

Though Byrnane wood be come to Dunsinane,  
And thou oppos'd, being of no woman borne,  
Yet I will try the last. Before my body,  
I will throw my warlike Shield: Lay on Macduffe,  
And damn'd be him, that first cries hold, enough (2101 - 05/5.10).

バーナムの森がダンシネインまで来ていようとも  
汝が女から生れずして、余に齒向かわんとも、  
余はこれを一期と戦うぞ。武人に似つかうこの楯を  
さっと前にかざそう。さあ、マクダフにかかろうぞ。

( = またはマクダフよ、かかって来い。)

先に参ったと言う奴は、恥を知れ

(試訳)

夢の破れたことを知っても、彼は戦わなければならない。彼は苦労を重ね、傷つきながら生きてきたように見える。だが生きていくかぎりには、最後の力を振り絞って戦おうとするのである。これこそゲルマンの叙事詩の英雄にふさわしい人物である。かくして主人公に共感し、感動を持って、われわれは劇場を後にするのである。

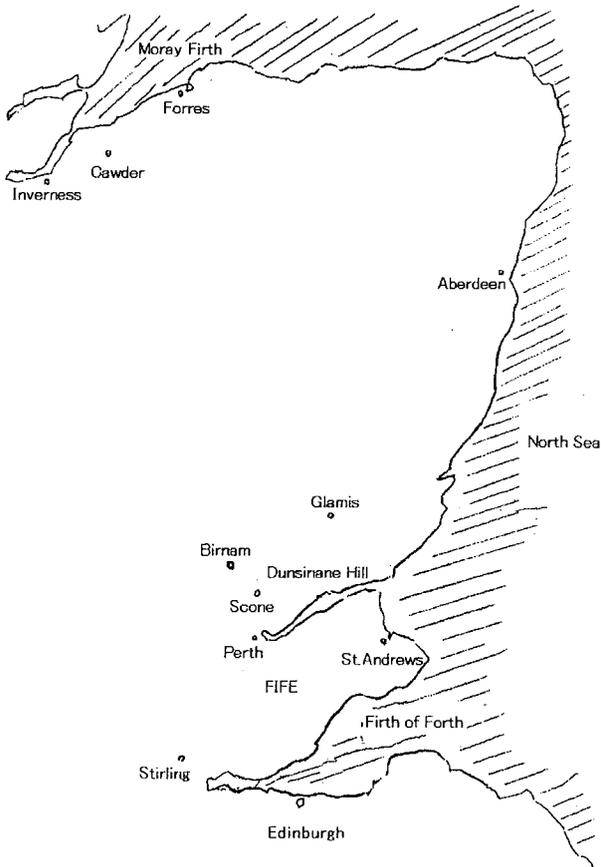
厳しい北欧の自然のなかで生き抜くには、人は絶えず戦わねばならない。必要な物資を得るためには、ときには他部族、他部落から奪うことも止むを得ない。他民族からの強奪は彼らにとっては生産にひとしい。このような戦いで絶望的な状況に立ち至っても、たじろいではない、逃げてはならない。自分の身を亡ぼしても戦わねばならない。これが戦士のすることで、今なお生きているゲルマン人のモラルである。<sup>(15)</sup>

尤もこの劇の主人公はゲルマン人と言うよりは、ケルト人の血の濃い人である。しかしこの国の説話では、どの英雄にもゲルマン人の姿が投影されるのかも知れない。ゲーテがシェイクスピアに感動して書いたとされる悲劇 Götz von Berlichingen (1773年発表)<sup>(16)</sup> に二つの民族(イギリス人とドイツ人)の共通の気だてが感じられるだろう。

ケルト人のなかにも英雄的な人物がいることを認めなければならない。その1人は、ロンドンテムズ川の岸辺、道路を隔てて国会議事堂のまむかいに、銅像となって戦車の上にさっそうと立つ女性、ケルト人の女指導者ボウディカ(Boudicca)、さらにまた一人は、カイサルのガリア征服の時、最後まで抵抗して望みを果さず、ケルト人の指導者の会議の結果、カイサルに引き渡され、凱旋行列でローマ市内を引き回され、その後で処刑されたヴァーシングェトリクス(Vercingetorix)である。彼はガリアのケルト人のなかで、有力であったアーヴァーニ(Arverni)族の首長であった。これらの人々

を思い浮かべると、強い感動を覚える。

拙稿を準備するための資料集めの際、多くの方々のご助力を受けました。大関敬子氏のお陰で、実践女子大学図書館のご尽力を頂き、Holinshed (1808 版) と、Dr.Johnson 編の Macbeth を始め、多くの資料を見ることができました。中村幸一氏 (明治大学) には古アイルランド語などのケルト語関係の資料の紹介を受けました。古庄信氏 (学習院女子大)、学習院大学英米文学科、ドイツ文学科の研究室の皆様には大学所蔵本を利用して頂く時に、大変にお世話になりました。伊藤真氏 (筑波大学) と青木敦夫氏 (玉川学園大学) も資料集めに助力をして下さいました。岡崎真美氏 (拓殖大学) には、この作品の日本語訳と、目下市販されている原文のテキストの数々を見せて頂きました。大変に有り難うございました。



## 註

- (1) 引用は Well et al (1986) の版による。個所は行数によって示す。引用された原文の行数の後で / に続く数字は普通に使われる「幕」と「場」の区分。
- (2) ホリンシェッドはマグベスの父をグラームズの領主のシネルとしているが、飯島 (1991: 130) と、Tauté et al 編のイギリス王家の系図では、マレー州知事 (Mormaer of Moray) のフィンレイク/レイヒ (Finlaech) としている。言うまでもなく、シェイクスピアは、ホリンシェッドに従う。Finlaech < fionn 'fair' + laoch 'warrior' (Hanks & Hodges 1988: 183. Finlay の項)。この個人名の要素配列はすでに英語式の配列順になっている (修飾的要素 + 被修飾的要素)。スコットランドの英語化の過程を示すものと言える。本稿 2.1.1 の mormaer についての記述を参照されたい。
- (3) Holinshed のスコットランドの歴史 (1571 年まで: 1571 - 85 年の記述は別人の加筆) は Boece (1527 刊) のラテン語の著述の英語訳から出発したと言われている。さらに彼のイングランド 1575 年まで、アイルランド (1574 年まで) の歴史を加えてまとめて出版された (1578 年)。1808 年に再版。その書の第 5 巻が『スコットランド史』。本稿で利用したのは、1808 年版の AMS リプリント (1976<sup>2</sup>)。
- (4) 反意語 fair と foul の対照的並立の Chaucer に見られる例は、コンコードダンス (参考文献表参照) でたやすく見いだすことができる。便宜上ここに列挙する。

### CT II (ML)

But what she was she wolde no man seye,  
For foul ne fair, though that she sholde deye (524 - 25)

### CT II (ML)

Kepeth this child, al be it foul or feir,  
And eek my wyf, unto myn hoom - comynge (764 - 65)

### CT V (SQ)

This steede of bras, that esily and weel  
Kan in the space of a day natureel --  
...  
...  
Beren youre body into every place  
To which youre herte wilneth for to pace,

Withouten wem of you, thurgh foul or fair ( 115 - 21 ):

TC

but wel woot I  
That it byhoveth that the byfallynge  
Of thynges wist before certeynly  
Be necesarie, al seme it nat therby  
That prescience put fallynge necessaire  
To thyng to come, al falle it foule or faire ( 4: 1017 - 22 ).

HF

Soun ys noght but eyr ybroken;  
And every speche that ys spoken,  
Lowd or pryvee, foul or fair,  
In his substaunce ys but air ( 2: 765 - 69 );

HF

That shewth hyt, withouten drede,  
That kyndely the mansioun  
Of every speche, of every soun,  
Be hyt eyther foul or fair,  
Hath hys kinde place in ayr ( 2: 830 - 34 ).

LGW F

She loste bothe at ones wit and breth.  
And in a swogh she lay, and wex so ded  
Men myghte smyten of hire arm or hed;  
She felteth no thyng, neyther foul ne fayr ( 1815 - 18 )

The Romaunt of the Rose の Fragment B は Chaucer の筆になるものではない  
とされているが、そこで見つかった例を念のために引用しておく。

RR (B)

All quyk I wolde be dolven deepe,  
If ony man shal more repeire

略記号

<u>CT</u>	=	<u>The Canterbury Tales</u>
<u>HF</u>	=	<u>The House of Fame</u>
<u>LGW F</u>	=	<u>The Legend of Good Women</u> Text F
<u>ML</u>	=	<u>The Man of Law's Tale</u>
<u>SQ</u>	=	<u>The Squire's Tale</u>
<u>TC</u>	=	<u>Troilus and Criseyde</u>
<u>RR (B)</u>	=	<u>The Romaunt of the Rose</u>

- (5) 『マクベス』の1417-18行の魔女の声を揃えての台詞のあとで、バンクォーとその子孫である8人の王の幻が現れるが、これはステュアート家のロバートが(スコットランド)王位についてから、ジェームズが8代目であることを示す。ジェームズの母メアリも王位についていたが、彼女は除かれている。その幻も舞台にでない。彼女がエリザベス1世に処刑されたという記憶にふれたくないのか、メアリがカトリックであったことによるのであろうか。いずれにもせよ、メアリはジェームズには敬愛されていなかった。
- (6) アイルランド出身の人には、Fitz-で始まる家名を持つ場合がある。たとえばFitzgeraldなど。これはノルマン系アイルランド人を祖先に持つことを端的に示す。アイルランドのO'(=descendent)、北アイルランドからスコットランドに多いMac-(=son)の代わりに、アングロ-ノルマン-フランス語(Anglo-Norman-French)のfitz(=fils'son')を使って父名から家名をつくったものの。
- MacArthur、あるいはMcArthurを家名辞典で見ると、アイルランド、スコットランドの家名(父名をもとにしたもの)としている。アーサーはブリタニアの英雄であるが、有名になったせいで、アーサーという男子名がケルト語区域全体に広まり、やがて家名のMacArthurがMac-地域にも現れたのか、あるいはArthurは元来、全ケルト地域に広く使われた名であったので、Mac-地域に当然の経過でこの家名が現れたのか、筆者には不明である。
- (7) 王家(または王をだし得る名家)が家名を名乗りだしたのは、スコットランドではマクベスの死後200年ほどして、Robert Bruce(1210-95)が王位争いに登場した頃からであろう。もっとも彼の先祖にはRobert de Bruce(d.1094?)と言う人があり、それ以来、前述のRobert Bruceは6代目とのことである。初代はイングランドにはウィリアム征服王に従って、ノルマンディはシェルブール(Cherbourg)近くのプリス城(Brix)から来たそうで、これが家名となった。

始めは北イングランドに所領を持ち、12世紀にスコットランドに来たそうである。王位争いのロバートの母はスコットランドのウィリアム1世(獅子王)の姪。ブルース家出身で初めて王位に上がったロバート1世(在位 1306 - 29)は、王位争いに初めて加わったロバートの孫。

王位争いに最初にブルース家から加わって志を遂げなかったロバート、その彼に打ち勝ったジョン・ベイリオル(John Balliol)も上記のウィリアム獅子王と関係があり、その別の姪の孫である。その家名もノルマンディの出身地の名らとされているが、類似した名の場所が複数あり、特定は不可能である。

イングランドの「ばら戦争」(the Wars of the Roses 1455 - 65)の2つのプランタジネット家(Plantagenets)、これはノルマン王家の女の嫁したフランスのアンジュー伯爵家(Anjou)の楯紋「えにしだの小枝」から来たあだ名、ばら戦争のころには家名として名乗っている。イングランド王家の交代は次のようになる。

ウェスト-サクソン王家 → デーン王家 → ウェスト-サクソン王家  
(一代のみ) → ノルマン王家 → プランタジネット家 → (ランカスター家 → ヨーク家 → テューダー家 → ステュアート家 → ...  
ハノーヴァー家... ウィンザー家

これらの王家の交代とその経緯については、別項で略述したい。

- (8) マルカム2世の娘ドナーダ(Donada)がマクベスの母である。
- (9) マルカム2世の娘ベソック(Bethoc)がダンカン1世の母である。
- (10) Antonine Wall. ローマ皇帝アントニヌス ピウス(Antoninus Pius 86 - 161. 在位 138 - 61)が建造した土塁。東はEdinburghの北西Bo'ness(Forth川の奥)から西はGlasgowの北西、Clyde川辺のKilpatrickに及ぶ。ピクト人に備える。
- (11) Hadrian Wall. ローマ皇帝ハドリアヌス、プブリウス(Hadrianus, Publius Aelius 76 - 138. 在位 117 - 38)の造った長城(中国の長城よりはるかに小規模)。A.D.120 - 23年に築城。New Castleの東のWallsend(Tyne川の北岸)から、Carlisleの西Bowness on Solwayまでに及ぶ。現在でも、ところどころに残っている。たとえば、北イングランドのHexhamの北郊。
- (12) St.Bede (673 - 735). 卓越した学者。New Castleの東Jarrowの修道院と関りのある修道僧。その著作のうち次のものが有名。Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum (『イギリス教会史』)。そのOE訳はOE研究の資料として重要。本稿でこの書名の後のLはラテン語原本(Colgrave編)を、EはOE訳(Miller編)を指す。
- (13) Macbeth 1387 - 88 (4.2).
- (14) Macbeth 1397 - 1401 (4.2).

- (15) シェイクスピアがこの作品で造型して見せたマクベスと、その資料のマクベスの像との違いを知るためには、ホリンシェッドを見なければならぬ。『マクベス』がシェイクスピアの四大悲劇に数えられることも理解されるであろう。

『翌日マクベスは、マルカム軍がこのようにして（＝払った木の枝をかかげて）寄せて来るのを見た時、いったい何事であろうかと始めは驚いたが、結局はずっと前に聞いた予言、バーナムの森がダンシネーンの城におし寄せるという予言が、今や成就されそうだと気付いた。しかし手兵を戦列につけ、勇ましく戦うようにと励ましたが、敵兵が手にした枝を投げずる〔その姿を現す〕やいなや、マクベスはその大軍を見て、早速逃げにかかった。マクダフは憎みに憎んでマクベスを追って、ルンファンネーン (Lunfannaine) にまでもやって来た。その時マクベスはすぐ後ろからマクダフが追ってくるのを見て、馬から跳び下りて言った。「裏切り者め、女から生まれた者には討たれはしない、と定められているこの身を、追っても益ないことだが、それでも追ってくるとは何ごとじゃ。いざ、かかって来い。おまえの苦勞にふさわしい報いを受けるがよい。」こう言って相手をきつと殺せるものと考えて、剣を振りあげた。

しかしマクダフは馬からひらりと下りて刃を避けたが、相手に近づき応えて言った。その間も抜き身を放さなかったが、「マクベスよ、お前の言うことはまことだ。汝の止まることを知らぬ残酷さは、これで終わりだ。魔女が告げたのは、わたしのことだからな。わたしは母から生まれた者ではなく、胎から切り出された者だ。」こう言って、マクベスに近づき、その場で殺した。』(Holinshed, pp.276-77)

- (16) これは Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) の初期の作品。シェイクスピアに傾倒して書き上げたものと言われている。ドイツでも大いに好評を博したとのことである。シェイクスピアの悲劇、とりわけ『ハムレット』と『マクベス』の影響をうけていると思われる。主人公の死に方が英雄叙事詩的であることが、この3作品に共通している。ただ2人の詩人の個性、時代その他の条件がそれぞれにあるから、2人の作風が全面的に一致しているわけではない。たとえばシェイクスピアは自分のこれらの作品が文学作品として読まれるものとは予想しなかったであろう。彼は舞台にのぼせる劇だけを考えていて、相手はロンドンの市民であったらう(宮廷のパトロンをどれだけ意識したのか、専門の方にお教えを受けたい)。ゲーテはライプツヒヒとシュトラスブルグの両大学に学んだ人である。彼がこの劇を書いた時にも、出来上がった作品の上演と並んで、文学作品を世に提供する、読みものを作るという意識は、彼になかったであろうか。しかも読者は一般大衆というよりは、インテリの人々である。このことが2人の作品の登場人物の台詞に違いを生じさせてはいないだろうか。シェイクスピアの作品での台詞は、一般的に言って短く平明で、舞台に飛び交う。ゲーテの主要人物の台詞が長い場合がある。時に思弁的な傾向はないだろうか。

たとえばいま問題にしているこの作品の第1幕では、主人公の台詞が極めて長いこ

とがある。これらは独白ではなく、会話である。このような長い台詞が繰り返されるその結果この作品にレーゼ・ドラマの性格が多少与えられるように思われる。シェイクスピアにも主人公の多少長い独白はあるけれども。

また場面の転換はシェイクスピアでは、当時の劇場の構造によっている。上舞台、内舞台、外舞台の使い分けを示している。ゲーテの場の転換には、このような配慮はなされていなかった。たとえばゲーテのこの作品の第1幕は5場から成り立っているが、すべて室内、そのうち1場だけが広間で、残りは同じような小さい部屋と思われる。ただ各場の多くはシェイクスピアのように短いようである。たとえばゲーテのこの劇で第3幕は20の場に分かたれている。

このような構成の理由は筆者には判らない。あるいはシェイクスピアの影響によるものか (a)、当時のドイツ演劇一般の性格によるものか (b)、まだ額縁舞台の制約がなかったせい (c)、ゲーテの意識には、舞台よりも叙事詩の展開がうまく働いていたのか (d) などと迷っている。

さらにシェイクスピアの頃には女優はいなかった。男が女の役をこなした。しかも歌舞伎とか京劇のように、専門的な女形はいなかった。主として変声期まえの少年が女役を担った。彼らはハンサムであるとしても、俳優としては未熟な場合も多いであろう。そこで登場する女性のタイプは限られてくる。ゲーテのこの劇に登場するアーデルハイトのような妖艶な女性は、シェイクスピアには出てこない。

一般的にいて、上演はシェイクスピアの方が容易であろう。

また思うこと：『マクベス』で主人公は乱戦のなかで討ち死にをする。『ゲッツ・フォン・ベリルヒンゲン』では主人公は病死する。史実との関係は筆者には判らないが、討ち死にのほうが強烈な印象を残すのではないだろうか。ゲーテのこの作では、ローマ教会またはその高僧にたいするよりも、神聖ローマ帝国の体制の方に好意的にみえるが、彼の宗教観と関っているのだろうか。彼がワイマールに行く前の作である。あるいはシュトラスブルグでの師ヘルダーの影響を考えるべきであろうか。

## 【付記】 イングランドの王家とスコットランドの王家

シーザーがガリア遠征のおりにブリタニアに兵をすすめたのは 55, 54 B.C. の 2 回であった。この時はガリアのケルト人制圧が主目的で、彼らと気脈を通じているブリタニアのケルト人諸部族に打撃を与えることを狙ったものであったろう。やがてクローディアス帝 (Claudius 在位 10B.C.-A.D.54) はブリタニアの植民地化に本格的に乗り出す。この頃にはイングランドのケルト人も、かなりの部族に分かれていたようである。たとえば『ガリア戦記』(岩波版)の地図参照。またボウディカ (Boudicca 自死 A.D.62) はノーフォークとサフォークのケルト人であるアイシーニ族 (Iceni) の女性指導者であった。410年の頃、ローマ軍団は最終的にイングランドから撤退した(寺沢・川崎 1993: 6)。この頃にはロー

マの画一的な支配を受けて、ケルト人の種族の独立性はかなり薄くなっていたと思われる。

ローマ軍が引き上げると、イングランドのケルト人は北からのピクト人の侵入を受けた。耐えかねたケルト人の王ヴォーティガン (Vortigern) はアングロ・サクソン人に援助をもとめた。そこでヘンジスト (Hengist) とホルサ (Horsa) という 2 人に率いられた一団は現代のケント州の東端のサネット (Thanet) 島にやって来た。時は五世紀の半ばである。(Gildas では 450 年前後、Bede では 449 年と読み取れる記述、アングロ・サクソン年代記 (Anglo-Saxon Chronicles) は『パーカー年代記』 (Parker Chronicle) も『ピーターバラ年代記』 (Petreborough Chronicle) も 449 年としている。その他にも 447 年とするもの (Nennius)、448 年とするもの (Chronicle F) もある。) ジルダスはこのヴォーティガンの行為をケルト人の悲劇の始まりとして嘆いている。島にやって来たこれらゲルマン人をアングル人と呼んだり (年代記)、サクソン人と呼んだりする (Nennius)。しかしアングロ・サクソン人が来たのは、これが初めてではない。彼らに備えるために 3 世紀末から 4 世紀始めにかけて、ローマ人は東海岸に防衛線を設けた。これを人はサクソン・ショア (Saxon Shore) と呼んだ。北東は「ひがた入江」 (the Wash) から、西南はサウザンプトン川 (Southampton Water) に及ぶ海岸に堅固な砦を造り、それらを連ねたものである (Hodgkin 1592<sup>3</sup>: 42)。この事からも 5 世紀半ばに初めて襲撃して来たのではないことは明らかである。

これらアングロ・サクソン人とは、アングル人 (Angles)、サクソン人 (Saxons)、ジュート人 (Jutes) から成り立っており、その原住地もだいたい判っている。ただジュート人とはゴート人 (Goths) のこととする意見もあり、ジュート人の代わりにフリーズランド人 (Frisians) を挙げる人もいる。これらの種族が別々に来たのではなく、混成のグループで来たのだと主張する人もいる。これら新来者はイングランドの各地方に国を建てた。これらの主なものを、アングロ・サクソンの七王国と呼ぶこともある。すなわち、Northumbria, Mericia, East Anglia, Essex, Wessex, Sussex, Kent (Fisiak 1933: 43)。

Northumbria は北海沿岸の 2 つの国 Bernicia と Deira に分かれていた。ハンバー川 (Humber) から北、トウィード川 (Tweed) あたりまでが Deira であり、トウィードの川の北からエディンバラ (Edinburgh) あたりまでが Bernicia であった。デアラの王 Edwin (585?-633) がバーニシアを征服して現在のエディンバラの地に砦を造った。これがその地名の起源であるとされる。すなわち Edwin+burgh>Edinburgh。これは同市の中央にそびえる岩山、現在のエディンバラ城の場所であろう。スコットランドが英語区域に入る経過の重要な事件と言えよう。

これらの国のあるものが、ときによると指導的地位を占めた。ウェスト・サクソン王エッジベルト (Egbert) はマーシャを併合してイングランド統一の勢いを示したが (A.D.829)、勢力を伸ばしたデーン人と衝突するようになる。

ヴァイキング、すなわち、デーン人はすでにイングランドに現れていた。ウェスト・サクソン王ベオルフトリッチ (Beorhtic) の時代に船 3 艘で襲撃してくる。このときは略奪をしてすぐ引き上げた (A.D.787 年)。やがてイングランドの各地に定住するようになり、

勢力を伸ばし始める。やがてデーン人はテムズ川以南を除いて、イングランドの大半を支配するにいたる。ウェスト・サクソン王アルフレッド (Alfred 在位 871-99) は幾度となくデーン人と戦って、痛い敗北も経験した。やがてグスラム (Guthrum) に率いられたデーン軍を破って結んだのが、ウェッドモア (Wedmore) 条約である。(A.D.878)。それはテムズ河口からロンドンを通り、チェスター (Chester) に向かう線の東をデーンロー (Danelaw デーン支配地区) としての不可侵条約である。この境界線は下記の地図で見ることが出来る。

### Britain before the Norman Conquest (Ordnance Survey 1973).

アルフレッド大王の孫アゼルスタン (Athelstan 在位 924-40) はブルナンブルフ (Burnanburh) の戦いでウェールズ、スコット、デーンの連合軍を破り勢威を示す。しかし結局はデーン人が全イングランドを支配するにいたる。アゼルスタンから5代目の王アゼルレッド 2 世 (Athelred) は后エマ (Emma) の実家ノルマンディ侯爵家のもとに難を避ける。スヴェイン (Svegn)、やがてはその子クヌート (Cnut) が支配するデンマークとイングランドの共通の王家が出現する。その後さらに二代でこの王家は絶える。ノルマンディに逃れたアゼルレッド 2 世の子エドワードが、呼び戻されてイングランド王となる (在位 1042-66)。彼は信仰厚い人で、ローマ教会からセイントに叙せられたが、子なくして死んだ。この王は「エドワード証聖王/または懺悔王」と呼ばれる。

ノルマンディ侯爵家とその一党は、デーン人 (ヴァイキング) の一団で、イングランドとフランス海岸を荒らしたあげく、ノルマンディに封土を貰って落ち着いたものである。またアゼルレッド 2 世は亡命後早く亡くなるが、未亡人エマは、亡夫をイングランドから追放したクヌートと再婚した。

エドワード懺悔王が死すると、イングランドの最も有力な貴族ウエセックス伯ゴッドウィン (Godwin) の息子ハロルド (Harold、同名の王では 2 世) が選ばれて王となる。弟トスティ (Tostig, Earl of Northumbria) はノルウェイ軍と連合して攻め寄せる。ハロルドはヨークの東、スタンフォード (Stanford) で戦って勝利を得る (1066 年 9 月 25 日)。だが、ノルマン軍がペヴンシー海岸 (Pevensey Bay) に上陸したとの知らせを受け、取って返し、ヘイスティングズ (Hastings) の北、センラック (Senlac) の丘に陣を張り、激しく戦うが敗死する (同年 10 月 14 日)。ウィリアム (ノルマンディ伯) は同年のクリスマスにウェスト・ミンスター修道院 (Westminster Abbey) で戴冠式を行ってウィリアム 1 世となる。イングランドでのノルマン王家の成立である。ノルマン軍の上陸は、イギリス国鉄でペヴンシーの東隣の駅の辺りであろう。駅名がノーマンズ・ベイ (Norman's Bay) となっている。

センラックの古戦場でハロルドが戦死したところには、その魂を静めるため、修道院が建てられたが、ヘンリー 8 世のカトリック離脱のあとでは廃墟となり、立派な門を残すのみである。その場所は女子のパブリック・スクールとなっている。現在ではこの辺りは戦争にちなんで、バトル (Battle) と呼ばれている (国鉄の駅名も)。

この戦争の勝敗の分かれ目として、次のことが考えられる。(a) アングロ・サクソン軍の兵器は戦斧で、ノルマン軍は槍であった。(b) アングロ・サクソン人は戦闘に馬を使わなかった。軍の移動には使ったが、ノルマン人は戦場でも馬で駆け回った。そこで俊敏な行動ができた。アングロ・サクソン人は戦闘の前に馬からおりた。馬を放って戦場から離脱させることがある。これは逃亡の手段が最早ないことを意味する。日本語での「背水の陣」と言うところであろう。たとえば古英語英雄詩『モルドン (Maldon) の戦い』に、馬を放たないで、乗って逃げる臆病者が出てくる。さらに、(c) アングロ・サクソン軍にはトスティとの戦いからの疲労が残っていたであろうこと、また (d) ウィリアムの卓越した用兵術が考えられる。

かくしてノルマンディ侯爵家はイングランドの王冠も得たが、ウィリアム 1 世 (在位 1066-87)、ウィリアム 2 世 (在位 1087-1100)、ヘンリー 1 世 (在位 1100-35)、その娘アデラ (Adela) の子のスティーヴン (Stephen 在位 1135-54) と続いた後では、男子の継承者はいなくなる。ヘンリー 1 世の娘モード (Maud) が結婚してアンジュー伯爵家に入っていたが、そこで生まれた子が王位を継いでヘンリー 2 世 (在位 1154-89) となる。すなわちプランタジネット王家 (Plantagenets) の出現である。

その後、数代してエドワード 3 世 (在位 1327-77) は多くの子を持つが、長子は有名な黒太子エドワード (Edward, the Black Prince) であった。黒い兜鎧を着けていたのでこの名がある。しかし勇名を轟かせたこの王子は早く死んだ。その子は王位を継いで、リチャード 2 世 (在位 1377-99; 殺 1400) となる。幼少であったので、父の弟ジョン (ランカスター侯) とエドモンド (Edmond ヨーク侯) が後見をする。(父の次弟ライオネル (Lionel) はすでに死去していた。) リチャード 2 世は長じて、ランカスター家のヘンリーと不仲となり、ヘンリーに囚われて殺される。

ヘンリーは王位について、ヘンリー 4 世となる (在位 1399-1413)。その子ヘンリー 5 世 (在位 1413-22) はフランスとの戦い (100 年戦争) で名を轟かせた英雄である。しかしその子ヘンリー 6 世 (在位 1422-61; 1470-71) は不手際でフランスにおける権益を失った。ヨーク家のリチャード (エドモンドの孫) はヘンリー 6 世に対して反旗をひるがえす。すなわち「ばら戦争」の始まりである。ランカスターは赤ばら、ヨーク家は白ばらをしるしとした。リチャードの主張は次の通りであった。

クラレンス (Clarence) 侯ライオネルは黒太子エドワードの次弟である。問題のヨーク侯リチャードの母方の祖父ロージャ (Roger) は、クラレンス侯ライオネルの娘婿である。リチャード 2 世が殺される時、彼はロージャに王位を譲ると言い残したとされる。ヨーク侯リチャードは、このロージャの孫である自分に、正統な王位継承権があるとする。しかし彼はウェークフィールドで敗れ、首を晒された。

ばら戦争で、結局ヨーク家が勝ちをおさめたが、その後ヨーク家内部で争いがあり、リチャード 3 世だけが生き残った。ランカスター家では直系の男子はすべて死んでいた。ただヘンリー 4 世の弟の孫娘マーガレット (Margaret) がエドモンド・テューダーと結婚し、一子を設けていた。すなわちヘンリー・テューダーである。彼はフランスに難を避けてい

たが、イングランドに取って返し、兵を挙げてリチャード 3 世と戦い、これを倒した。テューダー王家の始まりである。ヘンリーは同名の王では 7 世 (在位 1485-1509) である。なおテューダー家はウェールズの名家である。

ヘンリー 7 世はその娘マーガレットをスコットランドのジェイムズ 4 世に嫁がせた。その孫がスコットランドのメアリ (Mary of Scots) である。その子がスコットランドではジェイムズ 6 世、イングランドでは同名の 1 世である (在位 1567,1603-1625)。

テューダー家はヘンリー 7 世、ヘンリー 8 世 (在位 1509-47) と続き、その後は 8 世の子が次々と王位につき、最後にエリザベスが王位をついだ。エリザベス 1 世である (在位 1558-1603)。彼女は独身で子がなかった。父の姉の嫁したスコットランドのジェイムズ 4 世の孫娘メアリ、そのメアリの子のジェイムズに位を譲った。このことは前節でも触れてある。イングランドでのステュアート家の始まりである。まだしばらくは、イングランドとスコットランドは、1 つの王家を載く二つの国であったが、やがては 1 つの国に統一された。

イングランドは、アングロ・サクソン人が定住した始めの頃には小国分立であったが、デン人によって統一された。それをノルマン人が受け継いだと言えよう。ノルマン人の流れを汲むプランタジネットの人々は、イギリス化した。さらにスコットランドの王家がイングランドの王位を継承することで、ブリテン島は単一の国家となった。

近代の始まりと言うか、中世の終りと言うべきか、この時代にかかわったことで、私の興味をひく 2 つのことに言及しておきたい。その 1 つは次のことである。ヘンリー 7 世が王女をステュアート家に嫁がせる時、増税で費用を調達しようとした。これにはげしく反対したのは、トマス・モア (Thomas More 1478-1535) であった。彼は後にヘンリー 8 世に仕えたが、王のキャサリン (Catherine) との離婚と、アン・プリン (Anne Boleyn) との結婚に反対し、カトリックの立場を守ろうとして、ついには処刑されたことである。

さらにまた 1 つは、エリザベス 1 世とスコットランドのメアリのことである。エリザベスはヘンリー 8 世とアン・プリンとの正規の結婚をへないで生まれた子、いわば不倫の子とされそうであった。アンが王との内縁関係になったのは 1527 年であり、内々に結婚式をあげたのは 1533 年 1 月、エリザベスが生まれたのは同年 9 月であった。正規にテューダー家とつながっているメアリに対して、このことはエリザベスの弱みであったと思われる。エリザベスに万一のことがあれば、継承者の最有力候補はメアリであったから、2 人の関係は微妙であっただろう。

メアリは、その父ゼイムズ 5 世の死去の際、生後 6 日であったが、スコットランド女王となる。幼年期からフランスで養育され、フランス王家に嫁する (A.D.1558)。夫フランシス 2 世は 1560 年に死去、翌年彼女はスコットランドに帰るが、政局不安定、メアリの再婚と離別、さらに 3 度目の結婚、政治的不手際が重なって民心を失い、政争にも敗れてイングランドに逃亡した。再三にわたる反エリザベス事件に連坐し、1582 年の事件ではローマ法皇とスペイン王フィリップ 2 世との共謀の嫌疑を受けた。ついに処刑される (A.D.1587)。彼女の刑死の翌年、スペインのアルマダ艦隊が来襲、イギリスが大勝した (A.D.1588)。こ

のアルマダ艦隊事件が早ければ、彼女は刑死をしないですんだかも知れない。スペインにたいする恐怖心が失われていたであろうから。

メアリはこのように波乱にみちた一生を送ったが、その背景にはカトリックとプロテスタントの争いがあったように思われる。当時のスコットランドではノックス (John Knox) のはげしいプロテスタントの運動が進行中であつたのだから。他方では次の事情もあつた。

ヘンリー8世の死に伴って、その末子エドワードが同名の王としては6世として即位する(在位 1547-53)。エドワードはヘンリーの3度目の結婚による王子であつた。生前にスコットランドのメアリと婚約して、これはスコットランドへの侵入の口実を得るためであつたと言うから、厄介な話である。その後はテューダー家のメアリが継いだ。すなわちヘンリー8世と、その最初の結婚相手キャサリン(スペイン王家の出身)、この2人の子である。当然のことであるが、母を王妃の地位から追い落としたアン・ブリンと、その娘エリザベスに対してのメアリの憎悪は、激しかったものと思われる。国家がカトリックに戻れば、離婚は認められない。エリザベスは不倫の子となるから、王位継承権はなくなる。テューダー家のメアリはその晩年スペイン王フィリップ2世と結婚していた。ブリテン島の宗教の対立抗争は、王族の利害と絡み合つて、いやが上にも激しくなつたと言えよう。今この2人の女王は、ウェスト・ミンスター寺院の奥まった部屋に棺をならべて永遠の眠りについている。なお、イングランド王ジェームズ1世(スコットランドでは、ジェームズ6世)は、スコットランドのメアリの2度目の結婚による子である。

テューダー家を歴史の表舞台に呼び出す結果となつた2つの戦争の年代を、念のために記しておく。

百年戦争 (The Hundred Years War) 1337-1453.

ばら戦争 (The Wars of the Roses) 1455-85.

A. 欧文文献

1. PRIMARY SOURCE

Wells, Stanley & Gary Taylor (eds.)

- 1986 William Shakespeare: the Complete Works. Original - Spelling Edition.  
Oxford: Clarendon Press.

Holinshed, Raphael

- 1808 Holinshed's Chronicles of England, Scotland and Ireland in Six  
Volumes (Vol. V: Scotland). London. (Repr. AMS Press, New  
York).

2. SECONDARY SOURCE

(a) Other Texts

Brooke, Nicholas (ed.)

- 1990 The Tragedy of Macbeth (The Oxford Shakespeare). Oxford: Clarendon  
Press.

Furnace, Horace Howard, Jr.

- 1963 Macbeth (A New Variorum Edition of Shakespeare). New York: Dover  
Publications.

Ichikawa, Sanki & Takuji Mine (eds.)

- 1971 Macbeth. Tokyo: Kenkyusha.

Johnson, Samuel (ed.)

- 1765 The Tragedy of Macbeth, in: The Plays of William Shakespeare, Vol.  
VI. (AMS 1968).

Johnson, Samuel & George Steevens (eds.)

- 1773 The Plays of William Shakespeare. Vol. IV. (Routledge/Thoemmes  
Press 1995).

Muir, Kenneth (ed.)

- 1962 Macbeth (The Arden Edition of the Works of William Shakespeare).  
London/New York: Methuen.

Walter, J.H. (ed.)

- 1969 Macbeth. London: Heinemann Educational Books.

Nicoll, Allardyce & Josephine Nicoll (trs.)

- 1959 Holinshed's Chronicle as Used in Shakespeare's Plays (Everyman's  
Library 800). London: Dents & Sons/New York: Dutton & Co.

(b) Dictionaries & Concordances

- Simpson, J.A. & E.S.C. Weiner (prep.)  
 1989 The Oxford English Dictionary (2nd edition). 20vols. Oxford:  
 Clarendon Press.
- Kurath, Hans et al (eds.)  
 1956- Middle English Dictionary. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Gove, Philip, B. et al (eds.)  
 1966 Webster's Third New International Dictionary of the English  
 Language. Springfield: Merriam.
- Hanks, Patrick & Flavia Hodges (eds.)  
 1911, '19 A Dictionary of Surnames. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Onions, Charles T. (ed.)  
 1911, '19 A Shakespeare Glossary. Oxford: Clarendon Press.
- Schmidt, Alexander (ed.)  
 1901 (Berlin), '68 (New York) Shakespeare Lexicon. 2vols. New York: Benjamin  
 Blom.
- Schmidt, Alexander & Gregor Sarazin (eds.)  
 1962 Shakespeare Lexicon. 2vols. Berlin: Walter de Gruyter.
- Dinneen, Patrick S. (ed.)  
 1927 Irish<sup>(a)</sup> - English Dictionary. Dublin: Irish Text Society.
- Joynt, Maud (ed.)  
 ? Contribution to a Dictionary of the Irish Language M. Dublin: Royal  
 Irish Academy.
- Kelham, Robert (ed.)  
 1779 A Dictionary of the Norman or Old French Language. London: Edward  
 Brooke (Wakefield: Taberd Press, 1978).
- Greimas, A.J. (ed.)  
 1968 Dictionnaire de l'ancien francais. Paris: Libraire Larousse.
- van Daele, Hilaire (ed.)  
 1939 Petit Dictionnaire de l'Ancien Francais. Paris: Libraire Garnier Press  
 (Kraus Reprint, 1969).
- Stone, Lewis W. & William Rothell (eds.)  
 1977-'92 Anglo - Norman Dictionary. 7vols. London: The Modern Humanities  
 Research Association & the Anglo - Norman Text Society.
- Bessinger Jr., Jess.B. (ed.)  
 1969 A Concordance to 'Beowulf'. Ithaca/New York: Cornell University  
 Press.  
 1978 A Concordance to 'the Anglo - Saxon Poetic Records'.

Ithaca/London: Cornell University Press.

Cooke, Albert (ed.)

1968 A Concordance to 'Beowulf'. New York: Haskell House Publishers.

Oda, Takuji (ed.)

1982 A Concordance to the Riddles of 'the Exeter Book'. Tokyo: Gakushobo.

Kottler, Burnet & Alan M. Markman (eds.)

1966 A Concordance to Five English Poems (= 'Cleanness', 'St. Erkenwal', 'Sir Gawain & Green Knight', 'Patience' and 'Pearl').

Pittsburg: University of Pittsburg Press.

Oguro, Shoichi & Tetsuo Kimura (eds.)

1991 A Concordance to 'the Owl & the Nightingale'. Tokyo: Meikosha.

Oizumi, Akio (ed.)

1991 A Complete Concordance to the Works of Geoffrey Chaucer. 10 vols.

Hildesheim/Zurich/New York: Olms-Weidmann.

Saito, Toshio & Mitsumori Imai (eds.)

1988 A Concordance to the Middle English Metrical Romances. 2 vols.

Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris: Peter Lang.

Tatlock, John S.P. & Arthur G. Kennedy (eds.)

1927 A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to 'the Romaunt of the Rose'. Washington: the Carnegie Institution of Washington.

(c) Language & Linguistics.

Fisiak, Jacek

1993 An Outline History of English. Vol. I (External History).

Poznan: Kantor Wydawniczy Saww.

Fleuriot, Leon

1989 Le vieux breton. Geneve/Paris. Slatkine Reprint.

Jackson, Kenneth

1953 Language & History in Early Britain: a Chronological Survey of the Britanic Language 1st to 12th Century A.D. Edinburgh: University Press.

Morris - Jones, Sir J.

1921 An Elementary Welsh Grammar Phonology & Accidence. Oxford: Clarendon Press.

Thurneysen, Rudolf

1946, '93<sup>2</sup> A Grammar of Old Irish<sup>(b)</sup> (tr. By D.A. Binchy & D. Bergin). Dublin:

Dublin Institute for Advanced Studies.

(原書) 1909 Handbuch des Altirischen. Heidelberg: Carl Winter.

1949 Old Irish Reader. Dublin: Dublin Institute for Advance Studies.

Greenberg, Joseph.

1963 'Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements', in: Universals of Language ed. by J.H. Greenberg, 73-113. Cambridge, Massachusetts: the M.I.T. Press.

Jespersen, Otto.

1909 ( I ), '14 ( II ), '27 ( III ), '31 ( IV ), '40 ( V ), '42 ( VI ), '49 ( VII ).

Modern English Grammar. 7vols.

London: Allen& Unwin/Copenhagen: Munksgaard.

Macaulay, Donald.

1992 The Celtic Languages Cambridge: University Press.

Robertson, Boyd & Iain Taylor.

1999<sup>10</sup> Gaelic:<sup>(c)</sup> a Complete Course for Beginners. Edinburgh: Teach Yourself Books.

#### (d) History (General & Literary)

Alcock, Leslie

1971, '73. Arthur's Britain: History and Archaeology A.D. 367-634. Harmondsworth, England: Penguin Books (a pelican book).

Blair, Peter H.

1977 An Introduction to Anglo - Saxon England. Cambridge/London/ New York/Melbourne: Cambridge University Press.

Hodgkin, R.H.

1935, '52 A History of the Anglo - Saxons. 2vols. London: Cambridge University Press.

Loomis, Leslie.

1977 An Introduction of Arthurian Romance. New York: W.W. Norton Press.

#### (e) Old Documents

Colgrave, Bertram & R.A.B. Mynors (eds.)

1969 Ecclesiastical History of the English People (Oxford Medieval Texts). Oxford: Clarendon Press.

Dumville, David (ed.)

1955 The Anglo - Saxon Chronicle (Facsimile of MS F). Cambridge: D.S.Brewer.

Giles, J.D (tr.)

1848 Six Old English Chronicles. London:H.B.Bohn.

This contains Ethelwerd's Chronicle, Asser's Annals of the Reign of Alfred the Great, Geoffre of Monmouth's British History, the Works of Gildas, Nennius's History of the Britons, and Richard of Cirencester's Ancient State of Britain.

Miller, Thomas

1890, 1959 The Old English Version of Bede's 'Ecclesiastical History of the English People' I, 1. EETS os 95. London: The Early English Society, Oxford University Press.

Plummer, Charles (ed.)

1892, 1929, '52 Two of the Saxon Chronicles ( I ). Oxford, Clarendon Press.

(f) Maps & Atlases (Ordnance Survey)

Willis, J.C.T.

1956 Maps of Roman Britain (Southampton).

Irwin, B.St.G.

1973 Britain before the Norman Conquest.

Dawson, A.H.

1964 Ancient Britain (Older than A.D.1066). North Sheet.  
Ancient Britain (Older than A.D.1066). South Sheet.

Roman Britain (Historical Map& Guide).

Ancient Britain (Historical Map& Guide).

Hadrian's Wall (Historical Map& Guide).

Hadrian's Wall (Two Inches to One Mile).

The Antonine Wall (Two Inches to One Mile).

Hexham (Sheet 77).

(g) Genealogy

Tauté, Anne& John Brooke

The King and Queen of Great Britain. London: Thomas Nelson & Sons.

## B. 和書

### 1) 研究書 (歴史)

青山 吉信、飯島 啓二、永井 一郎、城戸 毅

1991 『イギリス史』 I. 東京：山川出版社。

### 2) 翻訳書 (原書年代順)

カエサル (Caesar), G.J. (近山金次 訳)

1942, 1990<sup>37</sup> 『ガリア戦記』 (岩波文庫 33-407-1). 東京：岩波書店

チョーサー, G. (梶井 勉夫 訳)

1973 (上), 1975 (中), 1995 (下) 『カンタベリー物語』 (岩波文庫 32-203-1, 32-203-2, 32-203-3). 3vols. 岩波書店。

シェイクスピア, W.

坪内 逍遙 (訳)

1935 『マクベス』 (新修シェイクスピア全集 29 巻). 東京：中央公論社。

野上 豊一郎 (訳)

1938, 1968 『マクベス』 (岩波文庫 1694-1695). 東京：岩波書店。

福田 恒存 (訳)

1969, 1976 『マクベス』 (新潮文庫). 東京：新潮社。

小田島 雄志 (訳)

1983, 1997<sup>17</sup> 『マクベス』 (白水 U ブックス). 東京：白水社。

木下 順二 (訳、解説)

1993 『私の「マクベス」』 (文芸文庫). 東京：講談社。

同 (訳)

1997 『マクベス』 (岩波文庫 32-205-2). 東京：岩波書店。

松岡 和子 (訳、解説)

1996 『マクベス』 (ちくま文庫 シェイクスピア全集 3). 東京：筑摩書房。

ゲーテ, J.W. von

井上 正蔵 (訳)

1960, 1971 「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」 (岩淵 達治 他編『ゲーテ全集』Ⅲ).  
京都：人文書院。

中田 美喜 (訳)

1979 「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」 (登張 正実 他編『ゲーテ全集』Ⅳ).  
東京：潮出版社

### 3) 年表

寺沢 芳雄・川崎 潔(編)

1993 『英語史総合年表』. 東京: 研究社.

### 4) 随筆

八木 敏雄

1998 「英語と日本語のあいだ(Ⅱ) — 男の魔女はなんという」(『英語青年』143  
巻 11号 (p.649).

### 5) 学習書

オーガルホ、カハル・三橋 あつ子

1991 『ゲール語④四週間』 東京: 大学書林.

### [おことわり]

書名のなかには、同じ用語でも意味が多様なことがあります。そのような場合には、書物の内容からみて簡単な説明を付けておきます。ただしこの文献表で、右肩文字を付けられた項目に限ります。

- (a) アイルランドの近代以降のケルト語を指す。
- (b) 紀元 900 年以前のアイルランドのケルト語。
- (c) スコットランドの現代ケルト語。
- (d) アイルランドの現代ケルト語。

### 6) 研究書(翻訳書)

谷口 幸雄

1929 『北方民族文化誌』(Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ)

溪水社(広島市中区小町1-4)

原著者はオラウス・マグヌス(北歐人)。ケルト人が本来はスカンディナヴィアに住んでいたか否かを判断するのに有用であろう。

### [註]

(イ) ビードはアイルランドの伝説に通じていた(本稿 p.○)。彼は Scythi の半島からケルト人はスコットランドに来たとする。このシシアをビードはスカンディナヴィアとする。ビードの『イギリス教会誌』の編者であるコルグレイヴはこれをトラキアとする。すなわちバルカン半島の東部とトルコの西部と解する。彼の編修したビードの『イギリス教会誌』の p.17 の脚注に論じている。

[おわりに]

貧弱な拙稿が日の目を見られますのは、本学の多くの方々の御好意によるものと、感謝に堪えません。さらにお読み下さる方々にも感謝申し上げます。また本稿のために、大事な思い出のある写真を提供下さいました古庄氏と大関氏にお礼を申し上げます。古庄氏は本学の学部と大学院を通して、大関氏は本学の大学院で私のコースを扱われました方々であります。私は大した貢献もないままに停年を迎えましたこと、申し訳なく存じております。

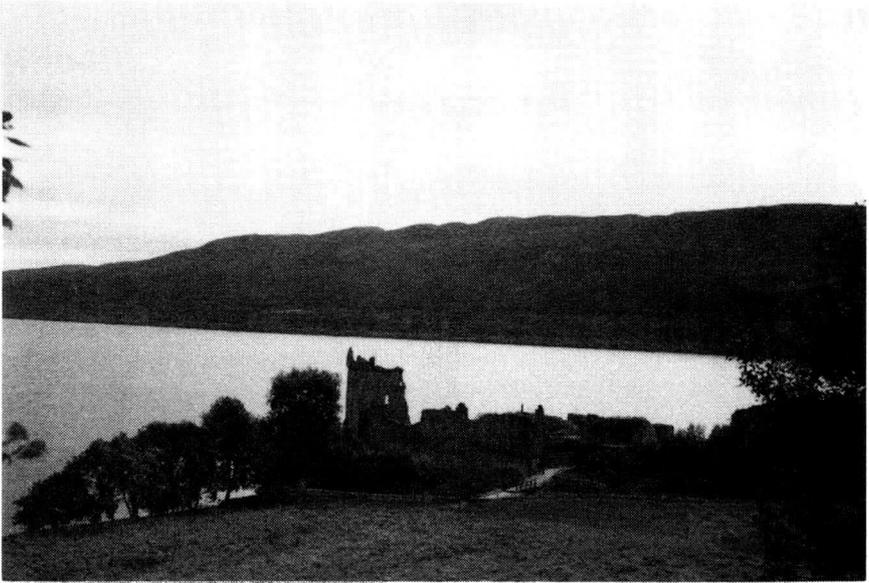
まだ本稿で扱うべき問題が一つ残っております。追加をお許し下さい。

[追加一題]

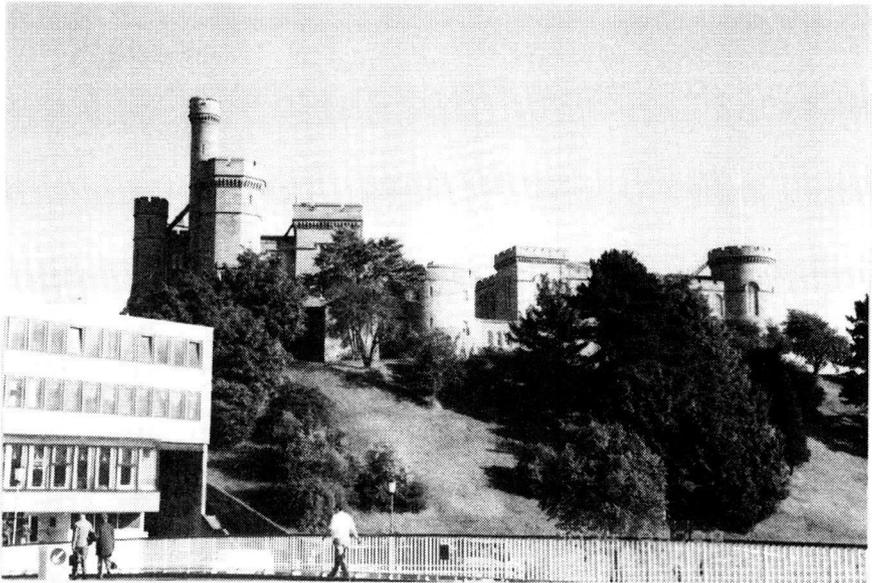
魔女がマグベスに将来を予言していろいろと申しますが、ダンカンには何も申しません。ダンカンがこれに不足を申しますと、予言のために幻を出して見せます。ダンカンの子孫として8人の王の幻であります。現実に王となったのはマルカム3世(在位 1058-93)だけであります。その後の将来のことは誰にも解りません。ダンカン以前のスコットランド王は彼の子孫ではありません。それでは8人とはどういうことになるので、ありましようか。

OEDで形容詞 *eight* の項に *an eight days (=a week)* という見出しが見られます。似たような例が 1160-1664 に亘って示してあります。(eight (形容詞) の項の 1b に)。「一群の、一連の、多くの」の意味でありましようか。「沢山の」を示す為には、舞台では無数に出すよりも8人を登場させることが便利ではありませんか。

(なお、マルカム3世もダンカンが死んでから王になるのであるから、ダンカン在世中のこと、否まだ王になってもいないのだから、ダンカンの子で王?1人も王になったのはまだいないのである。この事を忘れてはならなかった。)



図版 1 ネス湖。近くにマクベスの居城がいくつかある。



図版 2 コーダー城。ネス湖の近く。マクベスの居城の1つ。



図版 3 Stratford - upon - Avon (Shakespeare の生まれ故郷) の中央にある Bancroft Garden の Lady Macbeth 像。上にそびえているのが Shakespeare 像 (後ろ向き)。バックの桜の向こうに Royal Shakespeare Theatre と Swan Theatre がある。